昭和八年日記

日記（巻九）

昭和八年二月五日

ゆきち

田中克己

二月三日　ゆきと帝劇へ「新版の處女を見る」

指で果つき二の身にあれど揉ゆえ先きて取らるる

★

柿樹に雨降り

二月の空は羊雲が通る

わたしの雪はわたしに牽かれ

わるの庭を踏きながら隠れてくる

あの二の古風な處女の

なよいかな眉ひきを見たまつ

★

わたしはもう誰にも心を動かさない

わたしに頼って一人の処女がゐるから

その子は頼りないわたしを

その子自身の全てと望め

わたしの眼の中に何かの詩を探らうとする

わたしの前額に意志の軌跡をよみとらうとする

わたしは此の子ゆえに先きてゐるのに

この子はわたしゆえに先きてゐると云ふのだ

わたしはもうどんな女にも心を動かさない

わたしの[illegible]ゆめ、そしてわたしの晴れの明

二月六日

愛の花瓣は果して買い得るものであらうか
愛を育てるものかのごとく王の好餌であらうとも
その花瓣を彼はちぎってまきすてる
彼はいい咲をする 喉頭の見える位
愛の花瓣を彼は不要だという

★

アモオルは失礼な男だ 室外親切なものだ
しばしばその唇をたいて押寄りをする
いらないそば、帰ってちゃへ
アモオルはしばし泣くれ それから恐ろしい決意をする
アモオルは食物に毒をまぜる
彼は血を吐く 頬にアネモネを咲く
鏡に顔を映してみると真蒼だ
そこでアモオルに告白する
アモオルは白い衣の看護婦に変化し
一生彼を癒してやるやさしい死を与へ
それから又彼を盛り殺す
その間に男が覚悟をしてフったのを知らない
彼はアモオルを強立てと信じてあるのだ

★ ma neige

わたしの雪よ 女倉 廻める勿れ
わたしはおまえに鉄刺をもって行ってやる
わたしの雪よ 標ふる勿れ
わたしはおまえに 絡の外套をもって行ってやる
わたしの雪よ すすり泣く勿れ
わたしはおまえに 感詩をもって行ってやる
わたしの雪よ 怒るな勿れ
わたしはおまえに 羊の臓をもって行ってやる
わたしの雪よ おまえは何でも
わたしの才能の許す限りもって行ってやる
だい 夢と幻のそれをすべて解放してみるのだ
めぐめるなかれ わたしのゆきよ

二月七日

船出した水夫は海底に紅い珊瑚のあるを見る
わたしは雲の多い海湾をゆき
破片になった珊瑚たちを海の匂いまでへて吸ってみる
雲は波近く降りて来てがやがやと帆綱を鳴らす
鴎と波の親近さ 夏 樹蔭の翠を博ち

★

八つ手の蕾にわたしの幼年を見る
雲のある夜はいまもある
風呂の湯のたてる水の匂い
みみずの鳴きごえを求めてゐた

朝日に照らされた少女たちの胴体（トルソー）★
遊動圓木をわたる叫びごえ
焦だつ思いで見てゐたわたしは足元を汚して。

★ 妙正寺池の方へ散歩、べゆき。

取だの無花果の葉つぱたの
茎ゐるまゐ生せよ。
ミロのヴナスを逆しまゐ画して
振って見ると鹿さが出た
愛の蜜蜂の白ひを嗅いで
石灰のやうな顔色をして、ーわたしー

★

わたしはもう少し年でない
口笛を吹く年齢でもない
だのに口笛を吹いて
月の澤を歩いてゐる。
矢った詩を夢みて
あまりの未練さん。

二月九日
猫柳も咲いた

★

わたしの書の駿馬には白い犬と斑の犬
尾をめって月の出を待ち
わたしの処女の愛撫を求める

二月十日
ひとびとはオルガンを悲しく奏し
母親の柩を僕は見る
花環は萎れてその匂ひを立てる
すすり泣きの中に虚構を僕は見つける
安心してゐた、悪竜の自負れ

二月十一日　テアトル・コメディ
ハラスのひとびと
プラトニー童を愛した一青年
アリストテレスー先生より長い名をもてゐる

★ à Mademoiselle X.

わたしは人形を探してゐたのに
あなたは生いぶ生ひたった
あの黒い着物のマダム
それを運命と申しませう
わたしはあなたの上熟してない
生命の樹のあなたのほうたいのです
あなたへ林でいつかーれようと

★

わあなたの僕の熱は地物線を描いて上昇する
チューブでこそ胴体ん
何の金属で美物を二を〈ましょう。
絶望の論理をほるいかくゐみしめてゐた。

二月十二日

風の吹く雪のすらつく中をYと歩いて。

☆

二月、降る粉雪はわたしの額につもる
わたしのゆきしそのようん冷い。
わたしん接吻するは粉雪
わたしの唇は凍りついてしまった
風はわたしの髪を吹いて
わたしの頬は黒馬が嘶れ狂ふ
あなたの酷さいわたしは泣かれて
わたしは愛をおもしめたい

わたしの目は鏡縁めく
あなたの眼をのぞいてみたい
わたしは愛を求めるのん
あなたは冷し惜しみする

わたしはわたし達の不和がなしい
接吻もなしん 言葉もなしん
わたしたちは四辺ん[illegible]
あなたは後ろをないでゆく。

わたしん涙が浮んで来る
北風が眼がしらにとっつけする
紅葉がわたしん髪のもとへやく
もうあなたは影も見えない

☆レダ

鬼い鳥（羽は白く、嘴は紅く、眼も紅く、脚も紅いのん。）

わたしの肌を抑（つける）尖りつめ
わたしの肩を啄（ついば）むくちばし
わたしは肌が寒て気たつ
鳥の習性は空気をあらう——
遥い森中んこの森な所業があったことを
汝は藏めてひそかに泣たつ
蘆の葉よ わたしは羞かしい

☆

黄色いろつぷが草間に灯してみる
明るそはほのかだけれど
わたしの瓜を照してみる
十二あるわたしの冬の瓜
ろつぷは羞からって消えもせる

☆

いままで読んでみた本の字が
突然わたしん他人となる
未知のかな符號をわたしは瞳め
ぱらぱらと涙を流してみた。

☆

本たちのかなしさ。
置かれた場所にそのまゝ黙んで
古達の表心場えない（わしなたちなんてたしたものではない）

☆

Schlafe meine kleine,
Schlafe meine Reine,
Schlafe meine Eine;
Schlafe ganzes Nachts,
wohl in dem Bett,
wohl in dem Traum,
Schlafe wohl gesund.

二月十三日

蒼穹　匡四郎

☆

絶望の倫理
空腹の論理　仲宮く押しあってる

☆

空弾に倒れる人馬

二月十四日

Y. 中川俊郎

風邪をひく

二月十五日

二月十六日

女たちは単調に合唱(コーラス)をしながら
磴(どうだん)をのぼり降りしてゐる
海の見える女体柱(カリアティド)の神殿
遠くの白いは海鳥かシレエネか
夢(ユメ)の中のしげみに風がわたる

ひとりは大変かなしい
大変かなしいひとりである
何者にも代へがたいひとりである
ひとりは代へがたい何者かである

思い起すはかなしの歌

百段は四百段目の海の色
いしだたみのぼり降りつ人遠き

二月十七日 〈Y〉 松本一彦

1. 松田行一帰郷のこと
2. 松田行一妹二階にて嘆き云ふこと
3. 叔父嘆くこと
4. 結婚式のこと
5. 父方の伯父、叔父と事あること。
6. 松田行一帰京のこと。

Tホールで行一は十一時すぎまで踊つてゐて下宿に帰る時は十二時かつきりだつた。寒々した部屋の勉強机の上に新居の手紙が一通のつてゐた。叔父からの手紙で予ねから決つてゐた妹の結婚のひとつが一週間の中に迫つたから急いで帰郷するようとの旨が、簡単に書かれてあつた。何の感動もなしに読み終ると行一は帰りの電車の中で思い出してはたのしんでゐたダンサーのA子の体温をもう一度味はうとした。子思議にもうそれは浮んで来なかつた。いまゝでこの手で握つ

つてゐた。あの指や掌のもう何里とはなれた所で何をしてゐる。そんな他愛もないことを感じてゐると、そうだ、明日は帰郷しなければならないのだと せわせわしい気持が急に出した。行一はもう汽車にのつてゐる自分や、妹に 食つてものをえてゐる自分の事を考へ出してゐた。結婚式を控へた妹は 一寸木息い存在であつた。妹自身より自分の方がもつと気取がしい 思いをせずにはゐられないだらうなどと考へてゐた。

○驛につくと夕方だつた。

行一の休暇毎に帰り、又改在妹や弟たちの住つてゐる金井の叔父の家 はさう遠くなかつた。○市目指すその大通りに昔のまゝの大きな屋根を竜 たげた廣さで、古い向日に提灯などの吊してある金二郎でもう一すめつらしい 造りの家だつた。汽車の旅の疲れも手傳つて行一は一寸閾をまたぐとそ 感傷的になつた。

小僧のひとりが目敏くみとめて「おかへりやすし」とえみとトラックを引つぱ くるぬいもつて土間を先に立つた。

二月十八日 於山名氏修藏

於 工學 四・一三

風はわたしを目指してゐる
四辺には誰もゐない
まつ黒な杉の森に一つ灯り
風に向き合はれたわたしの脚
のどを吹きとほる風の枝
わたしは向きをかへる風のなかに

☆

嬰児の歯の中で彼女は眠つてゐる
月光白い歯の林
偏平洛の花瓣が一いらつつ彼女に咲く
はてしないその森に彼女は清浄である
わたしはそのなか寂み視の男は
眼を瞑まされてうつくまつてしまつた

☆

オルガン
そうだ風を楽器の中で
わたしの頭痛がはじまる
なにか懐想に似たもの
天井をかけまはる
髪の毛をもつてひかり上げる
見えぬ手のたしかさ
古風な手に静脈が浮き出てゐることを確信する

二月十九日 日曜 北國支衛 於修藏

サロメ風のむかしが懐かしい
薬をつんでゐたむかし
水龍骨を生やしたむかし

二月二十五　Y.　阿部と女郎蜘蛛の勉強

[illegible]

よるけ[illegible]疲れて帰って来ると
鶏ちゃが[illegible]取引をしてゐた。
ひつこをあげるのをひとは捜ちのみしてゐた。
ひる、鶏ちゃはふらふらってゐた
紅んへいをして。

☆

二月二十二日

女郎蜘蛛試験ち

Lau Luft kommt blau geflossen,
Frühling, Frühling soll es sein!
—Eichendorff—

なよ風
大きく吹き来れり
春なん
まこと春ならめ

昨日の夜はまだ冷い風が吹いてゐたのに、けさ起きて見ると
風はもう南風に変ってゐた。井戸の近い水仙の芽立ちも青く
風には生ぬるい肌ざはりがあった。わたしは例のやうに居殺場の
傍を通って学校へゆく。豚ちゃを屠ることを人々はけがしやめ
なのった。豚ちゃの悲鳴はよく傳ってきこえる「イヤーーーン」と
いふこえをよく覚てゐた。その後で濡れ手拭で板をおさへうなる
ホシカ
おする。乾鱈をよくくんだ臭いが鼻についた。

阿部次郎さんの講演雑記より

プリムラ・ウエリス（レナウ）

1

一の愛しき花よ
みくも早くも
帰り来る
禮を美しく
プリムラ・ウエリス。

牧野の花の
どれよりかそかに
なれは匂へれ
いとしき花よ
プリムラ・ウエリス。

なれのみきめ
めざめる春の
なよ
ささやき
誘ひ
プリムラ・ウエリス

力強くも
とく咲きるたら
恋人の花の
どれより美しい
プリムラ・ウエリス。

2

いとしき花よ
プリムラ・ウエリス
美しの花よ、なれをば呼ばん
信仰の花と。

空の
はじめの
黙示を信じ
急ぎ近づく
胸躍をいうきぬ

春は来りぬ
庶相はたくらず
雷務その春を
またおほふとも

花よ
なれは信じつ
神
むねをいうきぬ
なれいそみゐし
庶相は来りて
心臓
信仰
しほ春しほめ
花の
信仰の
魂こそは
とはに消えぬ。

二月三十日

関々雎鳩、在河之洲、窈窕淑女、君子好逑。

みさご鳥、河の洲にゐてつまどへり。うるはしをとめ、貴人にあふ。

參差荇菜、左右流之。窈窕淑女、寤寐求之。求之不得、寤寐思服。

悠哉悠哉、輾轉反側。

さがめなきぬなはをながらへおらぬ。うるはしをとめ、ひるまもよるまもとめ。

なやみねば、思ひやまず、あしたのなかをよるまでいめることなし。

（周南、関雎）

葛之覃兮、施于中谷、維葉萋々、黄鳥于飛、集于灌木、其鳴喈々。

くずの葉は、谷に延ひ、しげみんよりて、そのこゑ調へり。

（〃 葛覃）

采々卷耳、不盈頃筐、嗟我懷人、寘彼周行。

めどもあかもはこべらの、こころがけんもみたむる。まみをおもひてあはこそ、

みちべにおきすてゝ。

陟彼崔嵬、我馬虺隤、我姑酌彼金罍、維以不永懷。

をんのぼれば、うまつかる。しばしこがねのつをくみて、おもひわすれむ。

陟彼高岡、我馬玄黄、我姑酌彼兕觥、維以不永傷。

をんのぼれば、うま病みぬ。しばし兕角の杯くみて、いたみわすれむ。

陟彼砠矣、我馬瘏矣、我僕痡矣、云何吁矣。

をんのぼれば、うまやみぬ。しもべもやみぬ。あはれ すはん。

（〃 卷耳）

桃之夭夭、灼灼其華、之子于歸、宜其室家。

桃の夭夭、雅木は、そのはなさかり、この姫とゐば、宜室家のとかえ。

（〃 桃夭）

遵彼汝墳、伐其條枚、未見君子、惄如調飢。

河のつゝみに、木の枝を伐れど、きみあはねば、くるしきはかり。

二月二十七日

こんいろしエテ

方みなしいばの鳴る流水にも覚め

耳をすましてゐれば薄く消えてゆくそのいとさん

船出の音をし若覚してゐた。

＊

後、歌部のつをくするつをこらへ

西英のふる 渠ばれた

二月三十八日 宵をくてをくて河畔仲間を待つてゐる。

三月一日 ～ドん会の 一人と春のあはれー

宵を菊やまつかの長をひとん伏て

おぼろ夜をまちみき 梅し咲きゐたら

下駄、おでず西英 匹みたらお濃なん

ふをの蕾 西和なを思い云とかや

水仙の芽立ちの書し法くして

百仏のお一は一むら黄 れ 仙 この日咲梅いなるい 帰河辛

川の蕾 濃くして芽を挽れ雪 書 泥

~~仏地蔵の石んかしや 桜~~

雪の雲 石ん左いみち あらめ

海くれめ 石梅咲みす 館のとち

鶏の ~~中らかし~~ なん 啼くるち

川くぼ 帰 紅

帰郷 サ、ニ、ニ又ライエエヴ

己

やぶ柑子の実が赤くなりかけたころの春が来た。

☆

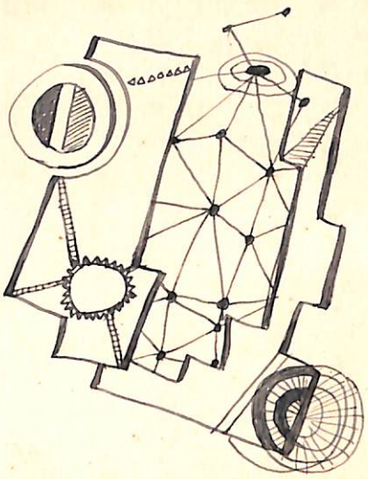
もう寒くもなく寒くない
ヨハンナの怒を凍らす風もない

☆

不和の時は遥かに
僕の顔は紅くなってそう。

☆

赤児のおそしなる時、
僕の犯罪するとき、



三月四日

春は野に花を撒きさうしんやって来た。墓あばけの太郎の犬の墓を花で飾り、そのバスケットから一つかみの花を辺りの土にまきすていまた行ってしまう。太郎は中めん春の跫足あとを見る。うすらうすらと霞たちが一面をつないでおくしてゐるのだった。

×

あなたのアドレスをわたしに下さい。みすぼらしい不思議なを会かゐてわたしに云ふ。ぬるもけれど。明日はわたしに少しした名をしつた妻の友達を信じさせるかも知れない。わたしは彼に安い銭を一銭り投げてやらう。

×

紙ナプキンおちる花瓣。洋刀の刃には うぐいすの畑が映り、
蝶がこの食堂車を徘徊し出した。

×

わたしはあるところを切り上げる。白い沈みたるころ、わたしはあの二ダヤの

戒を思ひ出す。友の妻、その妻の恋しさを語らぬ友とが
ちがふ。わたしは越えてはならぬ柵はよけて来た。だのにわたしは
なほこの石が生ぬるく思ふ。わたしは旅に出なければならぬ。

×

山吹の花を咲かせ櫻をちらしやがて此の東の都にわたしは帰って来る。拳銃がわたしを殺さねば。毒薬がわたしを殺さねば。

×

わたしの影をもう巻き出そう。雞が鳴いてゐる。夜更けの地震。わたしの足あとが戸外にしてある。時が来たんだ。阿修羅の影を跳躍ってゐるわたし。

×

車鶏ちゃぼはやく人の家をのぞきこんで鳴いてゐる。遠くで矮鶏の合図がきこえた。

×

次郎の手紙をまるめて捨てる。花子の手紙を文箱に藏ひこむ。次郎は手紙をよくよこす。花子は貧家のある手紙をたまにしかよこさない。花子の封筒には二人形がはれば長い目をしてゐる。次郎をわたしは厚と呼ぶことにした。

三月九日　試験おほわたすみたら、つぎトネ十二号 肥トのしのぶ」に泡ぐまし

三月十二日　Yん会はめて一週間近くれば、
ゆのつは丸友だちといわし。
わたしはわたしの影をみる。
ひとりの姿かを愛してゐる。

花の咲く野原を花をみしむしむと
その子のやって来るのを夢みた

ゆめはゆめでしかあり得ない
わたしはけふも雪のみちをゆく

わたしの足もとをふみしめるのは
雪の花、氷の花、あはれ苦く。

そしてわたしの pierrot のかげも
まぶしい太陽の下で消えてゆく

わたしはわたしの膝を抱き
もう天しか眺るものはない—

☆

ゆきびもをてらす都会の光出が、
楡の木のこしらんあかるく—
わたしは息吐く、雪みちの遠さん、
丘そいんらい雪の穂みなさなりか
雪女のしなやかをでわたしを牽く
わたしは凍えるかも知れぬ
遺書をおきもれめこん、夜の中ん。

☆

はてしない論争のうちん
史律の出発はむえつき
はてしない言葉の花びん
鋭い刃の鈍る ここちかする。

☆

わたしの捨てのはたいひとりのをとめ
わたしのもってゐるものはたいひとりのひと
(それはわたしが影をもってゐるより確かで)
そしてわたしが影をとう(得ぬ)ん
わたしの暗の中でそのひとは他のゆめを見てゐる
わたしはそれのわたしの夢を—
すき間の風がおきとほる、冷酷ん
一陣の風の涯で—

三月十七日 帰郷

まつげの涙うちぎは
ぬれた諸
潮つぼい風の吹くいるすぎ
貝殻がうちよせられる

☆

しらしらと夜の明け方眠をぬらいてゐれば見知らぬ山川がはてしらず
移り変ってゐる。まだおぼえきらぬ異色しあたとおどろいてゐた

☆

老年期のなごやかさ
丘陵、牛
敗頽した古城
花の咲く傾斜

三月十九日

ゆめらの中を文がゆく。

☆

ゆめるの中ん城がある。

☆

ゆめるの中ん鳥が啼いてゐる。

三月二十四日

パニセ

思念の中に森が見える
森の中に湖が見える
湖に城が見える
城の中で僕の思念が眠る
白い着物を着てゐる

★

Hilfe in der Not

Ein rechter Freund er-
scheint uns in der Not
Zu rechter Zeit und sich-
er wie der Tod.
Doch offen, Bester, sag'
ich dir:
Du hast eine ganz ver-
wünschte Manier!
Du trocknest mir den
Jammerschweiß
Und machst mir doch
die Hölle heiß,
Du bringst das ganze
Jüngste Gericht
Mit dir — bei Gott,
so meint' ich's nicht!

— Eduard Moerike

★

廣野をゆくのは誰だらう。雪に足跡をつけて、ああそれは私だ、青い私の[illegible]から花を咲き出さすために。ああ汚辱の花かんざしよ。ああ、お気の毒な

三月二十二日　一四〇〇

愛の苟の花をもって来たおまへは白い着物を着てゐた。病室の窓から私はおまへを見てゐた。おまへの足どりには健康な処女のそれがある。私は妬んで顔をそむける。十銭銭のあかんおまへは這入る。おまへは貧しく、そこは私の柩車の接ぎ目ところだ。私の寝台の汚れを、おまへはたしかに思ってゐる。クロロフォルムだ。一体菊の花弁はいく枚ある。おまへは金不可能の可能に努める。また私は発熱する。赤と青の線を調和させたあと、庭にゐるおまへ。わたしは東京の白ひもをゆいでゐる。

★

天の穴からガラスの棒。わたしの悪戯を止めさせると、あすこらでは聞き階級が住んでゐるんちがひない。卑劣なおつかで私は自分と差ずらはねばならぬ。

★

おひまの節は自動車で、あ、靴は汚れまで、私の室には一輪差しもないですから、そこで煙草一本吸きません。

三月二十三日

布きれのちらばってゐる巷。鶏の肉をすりぬける小僧。しもて水を貰ってゐるやうな屋台。僕達は眠の下隅を三をつてゐた。春風を芝居の幟と本の表紙の金文字に水素の気がしみつ泳くそ、いでゐた。

★

ブロマイドから埃を立て遠ら、醜悪を横断面に凝を北向けて立ってゐる。肩の上に金モオルをのせて、奴等の憐れと知れたそ。春の花のよる宮を嗅いでゐた女たち。

三月二十六日

水溜りを越えて人が歩いてゆく。春の婦人達のうなを。陽光をつまん。僕たちは貝殻をとってゐる。横眠でゐた人達は眼の裏で赤い光になってゐる。妖怪鉄道の煙が這って来た。

★

スコットは鳥を飼ってゐた。隅の紅いのを二匹。雨のまつりを

のを。スズメノヒエは瑞々瓶に入れてある。春の夫の中で俤を引いて初いてゐる。此頃ん花が咲って来る。スズメノヒエの花は青い。宇宙をみつめさいれると生意気をえった。

☆

音楽の連、雪解けの澤を動いて来る。いろんな白い、例へば桔梗、ハナナの皮、ごいっ焼けるんほれ。泡ためてゐた、息ぐるしいって。街道を森がゆく、屁臭がすると思ってゐた、眠がたをびくびくさせて。

☆

家鴨たちの沛面相を親しく思ってゐる。僕の十七年飼ったんだを泣まれた。毛皮へのる感、雪解けのなかに。すべてを客。森せめぎりん近い嫉妬、舞台裏には月を動かしてゐる。

☆

山焼のけむりは[illegible]生花の端香花しほれくたびつるらや。
別れはて忘れはてたりたとしも面かげもゆるかげろうの肉ん。

☆

眠ってゐる私のまぼろい誰かい白黒で国を割いた。構はずん動くと漆喰の壁んつきあたった。引かれを泥溝があった。鶯鳥が啼いてるやうな。眠ってゐるやれしんは泣いを感じた。

三月三十日

女倉蝿き一を習ひ出ばなを立ちましき
端香花咲くや此の家ん蚊も生れぬ
放蕩の身ん苦くて喫す烏龍茶
よもすがら沸りゐる湯ゆめ見ゐぬ

山藏院主より来信あり、もて深刻な顔をするまでえらの話あり
われはあまりん悩みすぎたる面かをもてるらしき
三月三十一日は中島と伊豆静城氏を訪れたり、夫婦茶二杯も来会しゐられぬ。

出たらめな言葉をつゐる。例へば始めの一語が出たらめであり、その次ん来る語。のせきは紙い表はれてはじめて驚くべき底のものである。

春雨やわが傘はあり他の家
芽青の一屋ともすおぼろかな
春愁えんあべくもあらず相して
桐の屋を芽立ちもどかしき
芍薬は花芽をやかる赤んほひ

岡部曹子いかんいかん

Yの歌

たい一人命かたよる君つよくませたる世の政風の如ん荒くも
あしたゆめ我がいのること神いまさば君ぞまりませきく正しく

二は繋世のくるしめなり

津の國の難波の春は夢なれや　八十八十年の月花を眺めしに秋の
新し、塙畫くされぬ者々ん（歌へ丸く餘波大津絵）

四月一日

松浦侯邸を訪ふ

眠は鶏鳴の松い巨きくみひらゐれ
こゑんはいやなア切和ちがまひってゐた
肉欲の悲しみの中に彼は眠り
眠りの中にも餓ハルスゐを養ってゐる
哀愁をぬまめわたしは眼をそらしてゐた
わゐれ、ひとりの幻れが永遠を告げるかをおそれた、
天國への道絶、何ってそれが取屋であろう。

四月三日

上野公園　田村家

はるさめやさくらつぼみかたりゐき
青空や雲雀のとりの巣は荒れて
松の肉ににぶいろの海老いろ百舌鳥耳不
よちのはれとゐし

ひんがしの葛木山をうす墨にこめ雨
雲ぼかしゐるて
古の墓をくづし石棺を手ゐ出せとよ
松は残れり
赤土の谷にはるかなながむれば峰々かす
むはるとなりけり
何となくこゑゐらちてゐたりけりしとしと雨
は松をゆらしぬ
きみまちばきみとうらもばこのてのの差の
ちたし何いこれひむ
この谷にきみとわき寝たてむかこゐゆの
見ることきでかちしき
四月
八つ中陽物　文久元年　十四　十五　十六

冒頭
全世界を
目的とする
諸方面
田中克己

十年進尺寸
我的時候兒
是不得信個識說

列宿指出。全世界上分成兩個
營壘、一邊是代表二万五千
万人的統治階級、一邊是代
表十二万五千万人的被統治
階級。統治階級与被統治階
級之間是絶無国界或民族的
界限的、

冒七
天東盆吉
梅、春、しつかん笑ける ゆかん男が 舘はあんまるかも
ゆうつきのほのかん人らすみかれる さまを思ひぬ 梅さるひと。

わるゆきん
ひたすらんゆかべとなれはきみおしかわきこころはすがんけるかも
家々んるき 新しい春の 哀味けりかるいたびこころうつろいんけら
春の雨あたらとぬらしそぼふるんしばしくらしかも思ひしせず
芍薬の芽立ちくれなる 愛しみかき 太陽さんなでみ来しるる

生こまぬ山春浅ければ夜きの風さむきとこの国りゆきけり

風寒き枝なるの起き伏しのかなしいことは忘みゆきぬし

土あ枝の木肌さむきなかめ白のてらすは来ぬひとほみかも

なかめつば雨雲くらき山るのわ枝のるん風わたるるゆ

一切ゆえ、宮滅爲樂。

四月十日　木村牛先生

一切の思惟をとどめよ、時の流れをとどめあん

★あまた鳩のあゆむこの屋根瓦（おオん、ウアレリイ）

わたしの記憶ありあそこにある

書斎の夜が開き開きしてゐるところで、

僕の夜欲し眠てゐるのだ。

失った時をもみんな集めて拾いまはらたい位だ。

脳髄をかな入海の波。

おほそい脚で歌を織る鶏たち。

★

あすこ青銅の寺院の屋根に

たえまなく新鮮をもたらす樹が生ち

わたなる先達たちが歩うたってゐる。

一本道を手をつないでゆく。（犬の尾が切断されてゐた。）

満潮のあとの泥のつぶやき。

秘密、秘密、そして僕の悪業は忘れられた。

四月十日

四月

四月十二日

誠太郎氏

四月十三日　夜池田徹と上京

四月十四日　夜入って杉並区馬橋四丁目三四二番地に新しい瓦方に入る。

ヨハネ十

汽車は悪魔を入つた（と聞いて）　新しい田園

ヨハネは手摺りもたれてゐた　なと南に開いた窓

僕の細い、弱いつのわるさ　を柵を置く隙あり。

悪魔の黒い目ヨハネを差ゐた

★

凡ての虚栄をとり去ると　地下

ヨハネは俺には何位なすぎる　安い安い瓦

俺の半球では彼は男爵に過ぎない　井戸は「死せる」で俺を終焉ん

口髭のつよい虚女た　舞華させた。

★　感性の論理は破滅

罪は贖はれねばならぬ　半環

罪には罪、花には花

咲きつづく罪の花、地の底さ。

中島の詩十二の詩「神」

海の向こうで誰かが合図してゐる

とそいき回やすくりの音をさせて

僕の方が白いけれど、これはぬまれる

四月十七日

長谷川巳之吉氏、辻野久憲氏

山口素絢氏

おぼろ夜の櫻に行くことなり

みなづきの若葉やのしきちまたなる

現気味にうつらと陸ち花くれあ

鳴雷くやこのいとやみを命なる

松の間に衛士の匂ひと鳥のこゑ

若葉の花はいつれ若葉は夜の匂ひ

雨ゆきき白雲の雲いとまらる

こつゆあべをとのの夜に花ちらし

鳥の鏡をすかすあたりや麗しまれ

水ぬるん陽ちそゆる春の雲の

四月十八日

俳句の手紙

GAPP.

俳句と唯物的、女と女を結ぶちかつたこれとそれ

七園克衛氏、山口素絢氏

Entrance

夕ぐもを山のふもとに巨大な青像画

凜々しい

眉のあたりに閃く銀刀

祖先の血を濃らしてこゝろみえた。

★

國定教科書のサクラ

書いオレンジエードの中に埃

蛙のゐる壁掛

四月二十一日

古本を買ると十三月に書れた

× × ×

魚たちの記憶で街は腥い

母が運ばれてゐる。急行列車で。

海濱の避暑地に仔犬が生うまれた

葉櫻の季節。人は見えない。

★

埃を駆けすぼると水が見えた

ペパーミントを成型つた杯と、

僕たちの口紅の薄いやうな果物。

成人たちはせをからかのん忙しい

若葉櫻から毛虫が眼におちる

しやうこうなく押し潰してー

[illegible]してみた。漂癖。

四月二十三日 岡田家 佐藤氏人の君。

櫻の本に花の埃のやうに群がつてゐる

水兵たちが樂器を卿て上陸する

街の透明が倦怠として二ゐれる

四月十四日　フランス国民祭の日に

Le 14 Juillet

Boum! boum! boum! c'est le canon qui annonce le commencement de la journée de fête! A toutes les fenêtres flottent des drapeaux. On entend les tambours et les clairons des soldats qui se rendent à la revue, la grande, la magnifique revue de 14 juillet. A Paris, elle est splendide: au son des musiques militaires, tandis que les avions volent dans le ciel, les troupes défilent fièrement devant le Président de la République, les Ministres, les Ambassadeurs et tous les hauts fonctionnaires. On voit, en grand uniforme, portant leurs nombreuses décorations, les maréchaux et les généraux célèbres. La foule applaudit, les acclame. Vive l'armée! Vive la France!

L'après-midi il y a des jeux populaires dans toutes les villes, dans chaque village. Et à mesure que la journée avance, l'animation grandit. Le soir la ville entière est illuminée, on danse sur chaque place, à chaque coin de rue. Une énorme foule d'hommes, de femmes et d'enfants se presse pour voir le feu d'artifice. Et quand partent le premières fusées, ce sont des cris, des exclamations: Oh! la belle bleue! Oh! la belle verte!

Le bouquet final est une magnifique gerbe aux couleurs nationales, bleu, blanc, rouge, qui ~~embrasse~~ le ciel un instant et retombe en pluie de feu, pendant que la foule enthousiaste répète le même cri: Vive la France! Vive la ~~Fra~~ France!

メルクの中から赤き
こやみと白き人のたのしさ
街の上の小さき灯おどろき
角々からあかあか漏れてきぬ

☆

春の国は調べやうらうらと
ちちやうり通の後を追ふのこころとなる
彼等の靴の上は通る乾いたるのみ

春の夜の
ちんぽやきてふ酒場さらに

四月十四日　丸三郎　松田明　[illegible]

祭の夜てあなたしの記念碑
しらしらと明るき顔に明るき色の人ら
わたしの記憶は永遠に色をとどめて
燃ゆる麻をもえてゆくわたしの春に思ひおこして

☆

美しい広き街道
わたしの眼は五彩を浴す
わたしの耳はエールを載せる
わたしの魂は花四月のごとく

☆

うるはしきかなしみを相語りてゆく
人間の動きのうつしかもて
わたしの魂は光りのごとく動きぬ

吉井勇の端で篇み草び編んひぬた
この部の紙屑籠を

☆

とびこえる
とびこえる
頑固な自殺を
とびこえる
とびこえる

☆

バラ咲くこの日
園の若葉
コトコトと柿の落ち
いるすきの夫人樂
ニヤニヤでゐる俺が男ごって
バラの枝が垂れる
花をつけて バンコニイから
わたしのいるね
噴泉がとまるかと思ばれた

梁豊均

山中雜詩

山陰未煙を見る、秋中若日を空想よ、鳥は巖上に向いて飛び、
雲は窗裏より出づ。

同 何遜

慈姥磯
草煙は遠山に起り、斜日安流を照す、一片の心を同じくして夕を愛せば
動く鄉愛を解き去らぬ。歸山孤雲と合し、連山遠霧深し。客悲自ら
已まず。江上歸舟を泊せむ。

折楊柳歌辞

馬に上りて鞭を捨てず、反りて楊柳の枝を折り、葉坐して長笛を吹き、
行客の兒を悲殺す。

遥かに孟津河を看るに、楊柳鬱として蒼蒼たり。我は是れ商家の兒にして、
漢兒の歌を解せず。

陳 陰鏗 渡青草湖

洞庭の春溺満ち、平湖錦帆張り。沅水は桃花の色、湘流は杜若の香り。
穴は茅山を去ること近く、江は巫峽に連なること長し。蒼天迴雲を澄ましし、
映日浮光を動かす。行舟遠樹に逗まり、度鳥危檣に息う。渺々
として測るべからず、一葉詎能航。

二十七日 夕方雪に遠望、西は高原、白雪の去。秋月。

おを書ちの八重櫻咲く柿見んばほほよとめ土埃ぞら
畦のこるをちかれ中田にすむくめり若葉にしつむ蛙ちたら
ならくぬぎ、うすあらきに芽をかきぬもちべの水はかなしう光い
来るみのる四日をはらのかなしけれ魚ら血流し釣られてゐれば
魚らのをろかなる肥をみてをりぬ蛙にあそぶ蛙らとてとき
おのよ山々に水かんよりて流れたり連山の上は草青みぬぬ
若芽がつ樹々のむらめり牡りんてかの丘はもり上り見ゆ
本々の芽にひとしほくらそ沈黙ぬち金色佛を師に祈せまる
み佛ら閻浮檀金化現まし彫像うき世めを形ぞられます。
ぞとと邪慳にて苦しみなしませしをとめを思ふとこい慕ひし
わかつの世をともにせむをとめをらる摩の水ましちかいてしまる

五月四日　女流文学講演会

白鳥、市村先生

先生は老来益々壮健でいらっしゃる
コーラスクイーンのわたくしもあすこんは
さう一九〇三年の昔にかへりました
わたくしたちの父のまた母と結婚しておなじ
わたくしたちは　しずかの結恋を思い浮べてゐる

☆

華やかなるテーブルクロスがおひろげられてゐる
紅茶やマアガレットの花陰で先生の顔がしばらくそこなない
コオトレットの汁で先生は影絵を浮べられる
先生は老人の咳をなさる。白い手ゆかいにいとしい。

☆

女流文学講演会　白鳥　岩井文男氏
池谷　宏先生の講演

五月一日　メーデー史
稿　君　岩井君ら
五月二日
春山氏より電話
五月三日
れ　遊びに来る
五月四日
辻　婦人　蒙氏
田園交響楽（ジイド）

詩

わたくしとおまえの間にはとげとげしい不和がある
おまえはわたくしの手をはなれると
牡蠣のやうな眼でわたくしを見つめる。
わたくしは怪物の情しか残らない

☆

わたくしが把握出来ると信じてゐたものが
眼の前で崩れ去ってゆく
空しい南瓜の幽霊でわたくしは
わたくしの夜の間の自慰のれて。
髪の毛が落ち散ってゆく
不協和音の調べをなして。

暮春の碑
やく春やかれも
去るしは芝生の上

五月七日　松本一彦　小川俊郎
三浦治
夕方　松浦先生の歓迎新しい掘し帰路す
雪はおまえの熱っぽい額を冷やさうと降り
ほくらはみぞのやうな路をあゆんで歩いた
おまえの咳は方々ないくので
僕は四月の静かな気配をあるき
それで咳をしめておまえは行ってしまった
僕をかなしますのに疲してをって。

蝶　花　花　蝶　草

五月の歌はたのしい雄々しい
たとへば青く輝く紅いすみれの花のよう
そこをおまへはさまよい到頭迷ふ
咲かなかなかせないながら
荒漠たる天の階段をのぼりのぼって。

あけぼのの光のなかにめざめるものの思よ、うすい雲されし
ひとすじのあゆまれとしめし群の道をとつぜん鐘を消しつゆきぬ
華やかなひとびとはあれを。ちくならばすれちをのこしゆくもうつなよ

五月八日 晴れ
文学座さんや 小沢部 子田 西郷
ちゃ長坂おと
べつ、田、西ら、中条、山崎、白井、松下、佐藤、安田、栄次郎、杉浦
弔辞よみかき、

五月九日
戸塚氏、父
夜上京

月光の下い海の色がある
人つるひとりのない
夏の夜がのれてゐる

五月十四日
わよくれんる僕たちの出てあるよ 僕の心がある
る僕たちは 愛の情とる一つのことん 感すきて
僕の卵巣をとつくん見へるいてゐる
僕の 窓帷(カーテン)を降ろせ 僕の手帛をゆることを止めよ。

外で雨の匂ひがしてゐる
外はスリッパがめきすてゐる
外へ出る 何も匂はない
スリッパ消え失せてゐる
僕は数度なんなる 汝なる神よ
外へ一歩 廊下よ。

五月十六日
夜の二人での歌 (エドアルド・メリケ) 杉浦悦子の思ひ出。
女 なぜ なぜ 夜の風は 数をあすめ
さやさんと たたて 苦 苦の木木をはしらぬ 4 ゐる。

五月十七日

菜園んな虹が立ち
晝の雨はアポロの額ん消えて行つた。

☆

海の見える前庭の晝食
尾をふる、犬らと子供と
潮くさい風とを四んの世。
母の懷

☆

豆かな匂りれっ花々ん燈ん
雨の積んでゐた庭はれうない。
子供たちはかけまはる
花をふみちらし驚かせ—
大人になった僕を俯んで見てゐる。

☆☆

地図を指で 料理してゐる教授
多倫諾爾 ここは食べるところ
戈壁 ここは砂利だらけ
新疆 虫が巣食ってゐる。
青海 膨れた腹が腹い。
刻刻は本来上った。ナイフたつオーケイ 巨きな四た。

☆

眼がさめると明るい晝が来てゐた。

汽車のとまった駅の外では何か紅い花をゆらす雨がふり、立ちなくものみなを光らせてゐた。僕は冊子ん眼をおとす。ゆめべの百のつづき。ゆめぎり。霧のおりてゐるプラットフォーム、それらが疾過して行った。雨は大降りんなりはじめたらしい。やがて海が見えて来た。

五月十九日

そのものと関係なきさいんとちが流れてゐる
わたしはそのものと知らない
たいていとつのものであるらしいことがわたしを震はせる
身うちがそくそくする

★

婚禮の鐘が鳴らされ
犬たちは庭園を走らまはる
けものはじめて邸ゆん耀りのつたをつうれしさん
子供たちは寢床ん近ひやうん
食器の音い耳をかたむける
大菓子を切る評力を羨むあまり
敷布を畳くしてゐる。
ヤマスミレ
素敵な接骨木の花ざかりの夜なか。

五月二十一日 来田 山麓子。

まつゆん眼を泣き腫らしてゐたみんなよ
生きてゐるぼくのだちよ
死んでゐるぼくのあたちを泣くちのん
ここ荒井場ん鳥のやうん虐めんゐるのだゆ。

七月二十六

今中今三郎戦死

その家は百姓、わら、柿本、信
濃ひとりが残されてゐる
永遠のまつ児
結婚の枕をかくせいとあらはれぬ

七月二十七日

ガラスを越して本が見える
子供たちの数学がてゐる本で
一面んまつ白な蚊が喰ってゐる
ぼくは熱を病んでゐるので
ゆめ氏の室の冷さが快い
子供たちの話がぼくの本をもやすつてゐる

★

ぼくらと呼んでゐる二羽
金魚の鬼塔んゐる鳥たちのかしら
垣根を跨ぐ分のるかたてゐる
まだ御用はありませぬか

★

ヒドラはふ一ぱてゐる
浮い水溜りもつつじの花を映すのん美しい
鯉や鮒やみな自人の姿を求めて
一萬年前の恐竜の書をいもとってゐる

★

Dragonfly: Tanaka
秋子ん笑せてやりたいのぱわたしの田舎の諸
苔葉に埋れた山あところ
ラムプをとるすゆめかたん槍の咲く路向

麥の向の海道の埃もしつもら
青い木々や草の白ひつまれて
わたしの弟や妹たちが帰って来る
向の脛ん先信をいぢいをへて
わいのから頃々ん蚊の書い赤んつく
農はそこで黎子一の手紙をかく
田舎はをいしいと。

★

知らない[illegible]と[illegible]い[illegible]をよまれん
郵便はめをしを犯せる
そう言ひ母を愛撫の仕方で
鉄や銅でくすぐる[illegible]るするのん

★

柿本屋かこつて行く旅塗を
取巻きって此の菖蒲が咲いた
紅い鯉と思い鯉ん
貴が陸上って来る幸せ[illegible]など
柿本屋いし貴ん所が色彩多い。

七月二十八日

わたしの陣は絶望を構んでゐる
わたしは孤ん孤独の花を咲かしてゐる
わたしは高ぶってゐる
わたしはハリネズミのやうん動す
しかしてれが何であらう
わたしの針は今抜かれてゐつたのんから
わたしは絶望の鋭を見る
ヨつパイ泪が湧いて来る
わたしはもうわたしを見ない。

九月三十日

村と村との間を縫って河は流れる
蝶々がひらひらとまる
蝶は棲まない
僕は橋の下の石の上に腰を掛ける
流れの向こう東京も
長崎の結婚
異降機
天鵞絨の階段は昆虫を思はせる
ひとは鋼鉄製の椅子を愛用する
造の作用はなくて成立するのだ

☆

胸に蠟燭を灯すほく
ミネルヴァの祝祭のために
智慧の洞穴から鼠を追ひ出せ
蜂。以はもうおしまいですか

☆

シロップはどこから吹く
ちらちらちらんぴぬはれる蝶よ
室々の硝子窓毎に花鉢をおき
室内には紙屑さへ一塵もない。

☆

十二時が来る
杜鵑が啼く
森はいとねむり
太陽と重なるので

☆

夢は流る黄金色の影法師の毛と
夕陽にもえる家がある
もとさいの出来の木林もちよ
ふ使ちゃん輝いてきるいろんな彩の着物着て
そこに五月の空が紅く染った。

☆

常緑木にまじる若あし楓の紅へ
自動車の吹き上げる土埃の中に
出れちゃかんでみる

六月一日

喫茶店
鉱気味を
石竹の花束が降り
海からは塩の瓶が来た
和蘭陀風の画額には
絶間ない溢れを防ぎ止めてみる。
さて木の葉のオレンジエードを
人々はペンプから吸いとってみる。
煙草は地味の地獄の焦熱をこもってみたのだ。

☆

六月二日

坂のつき当りの茶色薔薇の垂れ下る昼の一杯のかこの花
花びらフイルムエしかないてみる
心には数百くほど近い、郷愛安がそこでもれてみる

六月三日

悲の劇（愛子を失ひし父）

かぢりかけの氣味わるいオセロエダ

塩の瓶に差んで石竹の葉

くすんだ銅版画の中で人が釣してゐる

凡てはテエブルクロスの線より上にある。

六月四日

ちち

妹

妹からわ遺言を貰ふ!!

六月七日

Yと

六月十日

八つの鉢植ゑを

寝台車はいま動く

色褪せた影なのもつ人のなた

ひとびとは集まるみる。その人の死を知らんとて

腰い潮風が吹いて来る

日傘の下凡ての上に熱い

いとこん。

六月八日　七園瓦を訪ひ日ゆす

六月十一日　はせをの夏

五、窓を延宝、天和年間

菖蒲生ら軒のみわしの髑髏

時鳥いまだ俳諧師なき世かな

五月の雨岩檜葉の翠いまだぞ

ゆめ顔のねく夜の後架に紙燭とりて

2、貞享・元禄年間

夏来ぬと思いたつ葉のひとつかな

麥の穂をちよいつまむ鳴れかな

木つつきも庵は破らず夏木立（雲岸寺）

先たのむ椎の木もあり夏木立（幻住庵）

ほととぎす大竹藪をもる月夜（笈の小文）

ひんみりと撞や雨の花くもり

ねがしん羽もく蛇のぬけみかな

髪をとて客愁青し五月雨

入梅れのわたくし雨や雲ちぎれ（洗馬）

さみだれや色紙へぎたる障子の穴（芭蕉庵）

六月十三日

自轉車競争（イワレ・ゴル）

32人の世界の選手！

虹、青、白、赤、黄、が

正午を照らす

廻れ！黒い子午線の軌道を廻れ！

廻れ、ヨーロッパとアジアと！

みんなばばる　あなたのために　ぼくらは祈る　あなたのために

時計の文字盤
工場の調帯
緑の日傘
富籤の大きな輪
まはれ、まはれ奴等のために！

最後の一周！
銅鑼！
太陽は一輪車の上にさしかかった
競技場にある（る）ゴム輪のやうに
ぺんぎー、アたりー！太陽！
まはれ　ベネフト杯のために
~~死~~
一生懸命で

六月十五の
赤い煉瓦の建物の角で
空には雲をちぎりちぎりしてゐる
桜陽花をその花がしめつぽい
外國人の女が降りて来る
その坂の傾斜は大したことはない

×

不幸の感を感じない

海には淋しい山には畏れる
空ラレダから見る海は歯を剥き出してゐる
僕の松林を洗ってゐる
歯が歯がうしあたるやうに

★

マノン様お風邪を召しますよ
いいからほうっておおきってば
薔薇の花は馨りはこ言ん仕嗜く
あの人はまだ見えない
緞帳ひ月がのぼる。蟻。を嗜ぶ紅し枕しい

★

稲垣太郎氏を見送る　藤吉義江　中山正夫

ちょっとこっちをみてさんしん
芝じそこん見えましたね
汽車の動いた後でお淑女さんたちがえってゐる
僕のお尻の辺りで（何んだ見えはしなかったらう位置が低い）
送られる人、息子はお年特に四十一才の海軍將官

★

ユウゲントを捨てちまへ
その雑事を凡て嫌悪する（Y）
後に何が残るのだ
カントの消化不良と
ノウアーリスの児的性癖とか。

六月十六日

時計（イワノ・ゴル）

時間は既の塔からころがおち、
水晶の翼は街路にくだけ
絶望した天使の自殺。

永遠

凡てのモニュメントから時間は落下する
氷のような永遠
人間のために作られた
僕らは黙殺されて
毎日毎日。

毎日毎日奴等は僕らを殺す。
さようなら。さようなら。！
何処へ？
毎日毎日。
乗合自動車（オムニバス）は人馬（ケンタウロス）の様にセエヌを渡る
プリュッセル行は七時十三分に発する
朝の
地球は廻る。神様の自動車の五番目の輪の上
天使はおれの自殺する。
罪悪は不滅に残るのだ。

アカシア

夏の日は燦々と輝く
アカシアの砲弾だ
誰に投げられた？
僕を滅ぼす無数の心
億万長者のなだら
この葉もみんな因果の
この鳥もみんな苦しみの
ああ 歌へ
風はゆるやかに世界をゆする

アルプスの白い三角曲

1. 谷

草原で
匂ふ草をつまんで
すすのです。
空をながめます

木の木の
その根の葉の花
セルティメルクルに乱れます。

金髪の姫
牝牛たちがおります
静かな、永劫の原野です。

2. 蜂

僕は紅い心臓が感じる
僕はおとぎ話のやうに
僕の魂の青空は
雨です

六月十七日

《文子》

《火の鳥》山川弘子詩選務集

Mademoiselle divine!
Mademoiselle bleu-blanc-rouge!
Mademoiselle pleureuse!
Mademoiselle qui rit souvent!
J'aime vous!
Vous êtes ma bienaimée éternelle!

限りなく愛するそなたさま
水晶の翼で羽搏いて
天橋を辿りのぼられる方よ
虹のやうにそなたさまの足跡は輝き
汗は硝子の管のやうに光るし
吐息は二月の風のやうに白ばしい
海が見えるでせう　涙をためたお母さまとも。

十八日

見せてよ、見せてよ
鳥の葉たちは太陽をえらこと
押しあひへしあひしてゐる。そこで
黄色くさい臭の気をつきながら
閃くから出て来る
太陽が

★

わたしは戦争の窓に立つ神手なのでせうか
それとも家にあつて守る門衛なのでせうか
どちらにせよ遠くから遠くかけ（ちちるので。

こしかプールにゐるやうに（イワン・ゴル）
感覚的な性が足りないので
感性的でありませうよ
わが心を愛するには
それは恋人でなければいけませんから。

満天英つみんゆきませう
お母さまの上へ
歌ひうたふやうな天国は
まづ
ないです。

なぜやこころのそりなので
毎日あなたをせねばならぬ
苦や苦痛とよしのは
新春淡び
買はれるのです。

別れん泣く方には
僕は葉書を
ませう
感覚性がないので
感性的でありませうよ。

目覚し時計

噴水は夜も靖かに[illegible]ついた
[illegible]
[illegible]踊りもなくなった
[illegible]。

大聖堂で、寝るの寝床で
天使たちは昼の南京虫から守られる。
[illegible]線のもつれをときほぐしても
どこにまがあるのだろう
地球の獨楽は誰が廻はして、
[illegible]の涛音は粉砕した
田舎へゆく道は螺旋線で
空間のどこへ向ってゐるのさ、[illegible]ない。
牡鶏はもう お助けを呼んでゐる
女郎屋
[illegible]をもしない化粧した太陽は
[illegible]エリイ
太[illegible]を千鳥足で歩いてゐる
無邪気なれば歌ってゐる
人間だけはまだいびきをかいてゐる
月夜の精が[illegible]動力を絶ら[illegible]たので。

六月二十日
アルファベットの[illegible]のペアテ〜
L. L. Kondo
Mlle. L. E.
君は あなたの声で話ってゐた
素敵 そそれは申します。
あたいは お腹を通してるんだ

軍艦が[illegible]入ってゐる。
軍艦かもしれない。

★

アルコールを用いない
紳士たちは
[illegible]手を[illegible]す手は鋼の白いかまるで、
手帛が陸ってゐる
ふみんじらんれは獣のやうに[illegible]。

★

あたいは世間が淋しいのでお酒をのむ
一杯目から両世界評論が伴刊したので
ストローの再噴火も昨日まで知らなかった
あたいはみんなの兄弟まで[illegible]
バルコニーの下で月光と地中海がもぐれてゐる
バッタ・カイロ・多行が月の下から出て来た。

六月三十日
辻野久憲氏

六月二十二日
水の腐った池
それは黄昏の森に囲まれ
蓮の花のあれまん睡蓮が浮んでゐる
たった二ムフがゐるとしても大変泥臭い
向ふ岸にお社の鳥居が見えてゐる

六月二十三日
本位田来る

六月二十五日

Ⓨ

O toutes les mers et mers

海はピアノの低音部の鍵盤

誰かい僕まず叩く

海は貝殻の鐘の床

死骸になってとどいた軍艦いきされる

海は毎日の音楽の象徴

そこで凡ての女は髪を濡らす

海への道でいてはぬし

おわくの思いおかみな思いをされるので

海は山が迫り海のいろを決める

大東書にさいして心配気

海蛇を見るのだ。

ネプチューンを巻く

a Shingo Iwamoto

この世紀は皮肉屋なので

あなたは芭蕉をも知らない

梅雨と呼ぶ姿見とを

蝸牛たちが軍に入れる

陋巷に花が咲いて呉れを。

★★

彼女は塩っぽい、塩の泉をもってるので

彼女は脂粉をきらい

天仙粉をぬるのはちせいを防いため

それもまた塩っぽい

Ich würde Vater!

六月二十七日

クラス会 印象は紅谷

橋本、山口君

六月二十八日

山名君

盤積を学問は掘っねばならぬ

いつか何の美術よりも櫻桃の方が美しいと思い初めた

×

病院から子供をしようと奥さんが出て来る

外は雨降りで、高下駄の歯を鳴らして

×

アドミラ、アドミラ、蓮木林を一巡ます。

時々そそを横切る人影がある。海、それも懐かしい。そのうち一つとなる

時、帷のやうな処に引かれてゆく、さうして果しない夜が来る。

六月二十九日

泊る潭に釣を垂れるわたしん

鴉者を流れる道去よ

七月一日

本住田来る

七月三日

本住田、丸、船橋

六月四日

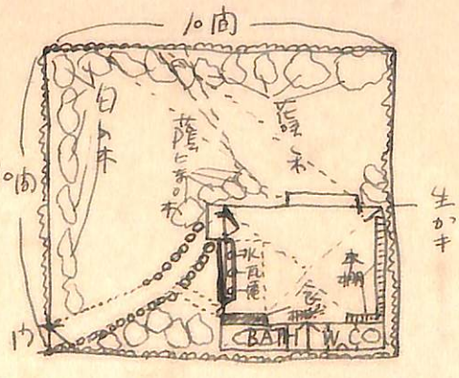
国松台

~~夏草や鼎のよるみちせばめ~~

~~濠割ん魚みて旭としてみぬ~~

~~山生物をめぐりて甚の堤ありぬ~~

~~泥の上ん舟揚かるるん玉ぶる~~



朝刊

風見鶏

四月の[illegible]は鳴りひびく。

おお花崗岩の軍艦は

蜘蛛の巣の中の

そこで月の男の魂あらを見張ってゐた……

自由

ゴシックの塔は入る色の風にゆれてゐる

その窓ガラスは空の陶器を破ってゐる

天使たちは眼をとすってゐる

修道院の煙ってゐる

廊下の部屋たちは

カフェオオ・レエの熱つの匂りを

キリストは[illegible]の鈴をかける

一番ふる電車は

踏会の一番後の場人[illegible]待ってゐる

[illegible]

大きな鯨かセエヌ川の[illegible]

[illegible]

空のフライパンで躍ねてゐる

カフエ・ピアルは眼ばたきする

大白鵠の停車場前で

階段のまはりを周ってゐる

「[illegible]」と「[illegible]」新聞が

メト。

重い鉄の地下鉄でゆれてゐる

[illegible]でもゐるやうな身体を暖める

その時間に

とてもちっぽけな鏡が

（才一頁の寫真）

刑務所の塀ごしに鏡がゐる

哀れな寡婦よ！

おけや僕らのわるい麺麭はいりかいた。

[illegible]

七月十日

まひるユレカア橋は陥没するところを

蝙蝠たちに見られた

海風のやく砂漠

ユレカア橋は死貝のやうに壊れてゐた

しびれない世ちが集って来て見る

血みどろの死汗を

（彼はもう肉塊をつんだ如のとっていい。）

★

白鳥たちは死んでゐる

あちらの沼で、こちらの池で。

花がさく　地は寒い

やめてください　なぜ寒い

太陽は死んでゆかない

★

七月十日

夏

梧桐の木蔭に（錆びた郵筒は）青く塗られてゐる

街道を遠く金色の馬車がゆれてゆく

柴が噴水のやうに

★

懸崖の中途に咲の花簪

貧かゐる つららが滴してゐる

雲は現れてゐる 芝生すゐ石のあたりから。

★

崖錐が発達してゐる

粘板岩に植物は生えない

この地帯の生物として兎

雪渓に足跡をつけてゐたので。

途方に暮れる ゆくして煮きない。

★

宿の畳に羽のある松の種子が散ってゐる

（牛の越えて来た峠では 蜩が鳴いてゐた）

紫陽花の蔭で 燈が薄く灯かれた

七月十一日

旅への誘い（L'invitation aux voyages）

蓮池は涸きかつて泥に人の足跡がついてゐる

我鳥鳥が漁つてゐる 陸の真珠貝をひろ

蛇が埃まみれになって街道を横ちつて行った

★

七月十二日

汽車が止まると駅の外は落葉松林

鳥が舞ってゐる 蟋蟀が鳴いてゐる

旅情を下ろして汽車はまた動きます。

★

鈴虫のいのちはあれば白金

田舎ゆえあのやうなおとをかなしびとはない。

風の中に蟬が啼く

とても勤勉な樂手である

★

夜は蚊の群れなって しきりにぼくを悩ますと

入れ代って蛙が来る

崖の合唱団 ケケ黄昏時

蟬ももう啼いてゐる 鶏が目をさます

ぼくの眠りはやっぱり深い。

★

熱帯植物も暑さに首垂れる

そのやうなるすぎ

崖が泉水に来る 乾いた泥に

そのわつもやな足跡をつけた。

七月十五日

七月十七日 Y. 園。の女と池

七月十八日

雷

ケンタウルスたちが出み合ってゐる
蹄からも火花がとび散る
吐く息は熱くるしい
やがて雨解をもたらす黄青な雨が降って来る

國境

海から吹く風は暖い
青空の玉家と風にあれる旗たちをなびかす。
馬車などは白墨の線で止まらされる
巨大な蓋伸べられた腕である

象眼

宮殿に宮殿たちは押しこめられてゐる
大理石の匣の外側に、
さて甲虫たちが眠ってゐる
白い蔦紋布や花環などを
身の宮殿で象眼して

incrustation

ノヴァーリス 夜の讃歌

2.

朝は常に遠って来る光のものであらうか。現世の勢力は絵はうめであらう。永久に

の神の秘宮は永久に燃えゆであらう。光明は高貴な者の眼

を向けられしかも夜の支配に果てなく無限のである。一眼らの絶

望は永遠である。聖なる眠りよ。行事の中に全く夜の祝い清めしもの

のみの幸せとならしめよ。

七月二十三日

黒い書一類の咲き洞むところで
あの頭かほくを震へあがらせる

もう二度と見ない
夕焼け空の下のあの影を

蜘蛛たちの嘆き止めたあとを
そんな一頭のいるかほくを取巻くのだ

七月二十七日

灰色の陸
たそがれてゆく夕焼空の雲は
さびしい陸を彩ってゐる

おまえはその近づくのを知らぬ
その光のディーもきまれない

あたしいの山をもる男のやうに
秋は世界を通ってゆく。

おまえ
だけど、蒼く色あせる野の中に
おまえはわれらを感知する

(エムデアフ・ツワイク)

柏樹の咲く喜びから白樺の葉書をよこすなかた
蒼ざめた弟と歩く路には雨霧が深い
フオルム、フオルム、從耳える山々も陽が遠くとほつて見える

春の樹木（ハイク）

方々の樹木はどうして蒼い
空をその梢で塞いでゐるのだらう
このおびただしい緑の雲たち。

その間にまじるこの白い花、この白い花は
時がたつてもう萌え出た新しい
孤独のしらうめとも星なのだらうか

空に屋をいまつけてゐるものを
あの土びかり冬の日の
反射のあてゐたものとほんとうに同じものなのだ
それをほしがらせるあるかれて眺めたもの。
その幹が春の近づきを
ましてはゐないかと

駅員方もなく枯れて空に屋の残骸と
彼等はいつも立つてゐる、そして四月の脚を
呼吸つきながらあせじいの風の中でゆらゆらしてゐるもの。
私の目に涙のうつる女者ざめた、黄色
黄色の蕾を芽ざしてゐるもの
ほんとうに同じもの、一つのものなのだ。

夕暮の哀愁（ハイク）

夕暮の哀愁よ、なりひびくものの音よ
くらやみのたましひよ、青春の親友よ

夕暮の哀愁よ、慰めいよ悲痛よ
わが孤独のやさしい遊びる達よ

夕暮の哀愁よ、ひかく高貴よ—
夕暮の哀愁よ、あなたをわたしは感じる！

甘いもりを含んだ時の唇が
いまいそやかにわたしの唇に降つて来た

やはらかな、晩がやさしくわたしの頬を
撫でて、わたしを含く

もう[illegible]ほちなま（ろ性さん要へます。
おまへの哀愁の情に身を委ねよ

七月二十八日

ぼくの上を草や木が覆ふ時
紙が紙屑が残る
それを友だちは知性のないぼろぼろの
見知らぬ人たちはいつそ白紙の方がましだつたと怒るだらう
みんな金銭をつけ動産を保つて、

七月二十九、

帰郷　落井　肥下

七月廿一　船越　伊東　中島諸氏

あの人は 遠いまま風景（ソウカク）帰る家のだ、子供の時わたしは
罪もない 桜の実を見たのだ。でなければ自分
旅で今や また、それをそっくり失くしてしまうのだ。
あの日の少女は（いまわたしの胸に）苦しみする
まるで鏡の月夜の来るように
見せられない。

八月一日

いま他人らしくわたしを瞶める この街が
わたしを生んだふるさとなのだ
その証拠を 邪慳な仕方でそれは見せる
たとへば 大きらひな幼い時の喧嘩友だちや
きざな同じ語をつかふ男の姿で。
それからまた、うるさい伝説のすがたや 分つかないで吹いて。

★

チューリヒ湖畔のアルプスの光（ソワイク）

この窓の檻の中に 黄金色の風と共に
微かな しづかな良い少女を誰が呼んだのだらう？
しづかにそれば わたしを呼ぶ、そしてもう わたしは名を覚えた
それは秋だ そして 祈りを告げようとするのだ
書斎の中空にある峰々は

いまは遠く 色々の光のなかに輝いてゐる
ああ、ここでいつも同じく感じさせる。明澄の中に
もう過去と廃墟の一部であることを。

そしてまたも一度 わたしはいつもの如く
夕ぐれの路を谷間へ下って行けばよからうと。
そこでは私に夜々が早過ぎるから。

そしてまた、家々の外が暗くなる前に
遠方の灯が窓から通りまで
夏の夜を暗の中に見れはよからうと。

★

あさか山 影さへ見ゆる 山の井の 浅き心を わが思はなくに（古歌）

たそがれてくれなゐばらのはな園をとめは去らぬほのかげみれば
をとめ子の頬のほてりとくれなゐのばらはそのきらめきがてめ
ゆきおりんきみがはたひとをおとし思ひゆふべんあれば

★

八月三日　雨

冬（ソワイク）

神様に、大空高くさすらふ風の上に、
枝々は凍る腕で祈る
おゆるしを、おゆるしを。
ああでもらん、もう春の準備(よそほひ)が出来てるんだよ
2 いま白い悲哀の中に再び雪はふりしきるが、
それでもはや血の中には花が咲く。
ああ そなたの永劫の熱情の
春の息吹を焔へ
そして鋭い寒さよる雪を避けさせよ
かれらの花から。それは花を
痛ませる……

八月三日　船中にて

よすがら波の音を聞く
わたしは眠剤をおそれるやうに
百合の花冠を微笑いした女王を
血みどろの戦車が一度は行った
すべて過去の雄々しいである
いま悔はわたしの手に握られてある

★

青い砂地に僕たちは山をきづく
山頂迄とそびえたれば何よりも厳しい
僕たちはユウゲントをもち持たない
心臓は凝った汚血の塊である

八月七日　神戸を発ち　支那へ

山茶花の花々
ぽつぽつ咲いてゐる。

★

鴎がはばたくのは夜を抱くための
夢束の深いてゐるのんとまる
燈台。

★

緑色の海――暮れ残る
海岸の砂地が白い。
すべてが
虹を発射する海潮は美しい。

★

永くいく船の
波を見る者は勇ましい。
甲板のあれまで、風に駆ける。
燈台、波のやうに流れる潮。

★

海風や明るの浦に白は敢ひら。
夏草のおれて流るる海の匂ひ。
海つ海に沿れのつるつるとめやら。
雲やまきと見る向こうる島の影。
鴎どもとびうをと海のつらしき。
白魚を[illegible]ことしいくばくか。
潮路やよへるものん仙しとよ。
夕日あか海に影をなびけら
燈台のおちかしるるのげをえよ。
雲立つや陸路。汗ばむる合の花。
夏のるは潮路にれて見いひ。
左舷紅燈に色とひかる曲り船。
潮の重を浴衣にうしぬるとす。
どんみりと見るや海の魚の眼も。
三十年来ちらしはどは何れ見ず。
命ちりきみかのいなは沖の夜。

八月八日
内司

家たちの造りあつてゐる山
こちらは何と雲のうるしい山

★

海丹、鳳凰、朱鷺
街に出る。夜の中　西洋婦人のおとこ子

★

雲と波とん追ふやうにうとうとと上陸する

江南亭るが 花をおしてみる
近藤なの水平線は大変明るい。

★

海沿い街の辻の高台の上る道町
七月のおしるい 色彩のまい竹の枝が
色づく 横町 ある 傘かぶって用を足してみる
アフオリズムを見つけれなく
大変の退屈である

★

これはみず、みつなのよ
鳴ばそんなをを云はない
あの人の眼をを見る
睡毛をけで他人をんをめつける

フレーマ 漂流、 フレー 伴船 グーレー 漁戸、 ムイヤーレニ 漁b、 ナッセル 投網、 ムイ舟、
リッカレニ 海山羊、 ローレニ 山石鹿、 タイペート 山風 ティラドオ 船手 ヒエ水 ヤッツ 牡蠣船
ナッツ 水脈 クラッシュ 流れ アフルル 船言報 ラスレーズ 港 ラスレーズ 猛騎士
スエル 海豚 グーレー 船b スエペレー 海嘯 カッ アリエ 帆船 アイヨール 山清 エッイ 見物

こしは砂やれもすを海のよ流る。

船は貧乏よるをつけてみる
闇の中で飛魚の鱗をを数かせてみることの
船尾の甲板ムは犬を四匹ん首掘る男を三匹飼ってみる
そしてその船尾は動揺もてはげしのん
やを見える壁がゆれてみる。
すべて水平線をんて語はあり得ない。

ひと島はひと島 送ちゅふくれや
ゆふくれのわが中い 船とゆきちはず
ゆけから一年を島 かちんけら

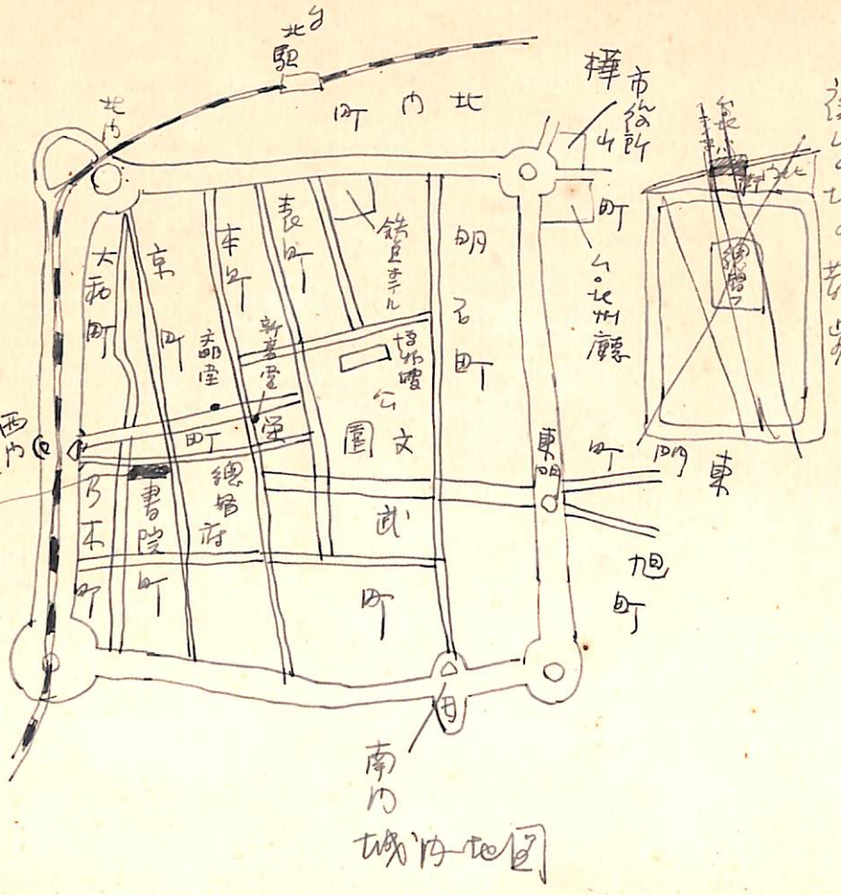
日は雲ん出る礁とほき水けから
右 壹岐 對島 左 平戸 五島
わが中の道 をくて、ろ
八月 は 夏ら海路 輝 沈ち。
夜甲板ん ちれば 星 午 闇 千 ち
些か Sea sick 気味で 頭痛 がする

三半規管
子供の 夜 喧 きるをし
八月十 の アジコー 島 (彩佳島)
甚 隆 島 (1)
甚隆湾

(1)
山 と 船 板 の ちゃみん 多い 湾
戒克もある、 砲 台 が 顔 を 出 してみる 女 山
八尺門 という 海峡 の こちらは 社 島
赤い 旗 ある みへる 海れ 浴 場
キールこんら台 北 まで は、 甚隆 ー 甚隆 ー 八 埼 ー 南 五 (マ汐ピー) 埼 ー 南 湾 ー
1 松山 ー 台北

(2)
羊 ピ 類 の 大きを 甚 本 つ見 える 女 山
水牛 と 水牛 住 の 牛 ん 年
鷺 島 と 家 鴨 と る 鳥 と 台 湾 から ス
(白 鷺 は 実 ん 多 い)
ホテイ 藝 の 紫 の 花 ん 木 槿、 双 思 樹
かじ立 ん の 気 根
朝 の 霧 花 は そ ら 変 ってみる (あ まり 熱 いの で)

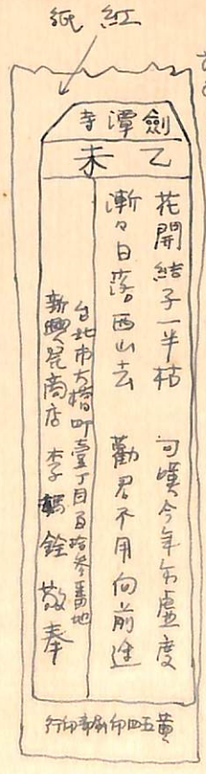
本島人の家の入口は殆かかってみる
線香い色彩が多い（丹碧）
墓が見えた。田圃の中の墓は南向して。
大屯山、七星山、観音山、
双思樹の並木の蔭で涼をとる人たち
× 北門外一三 樗樹飯
蔡公の墓



台湾神社
せんろん入るべからず
鉄路不准進入
運転手 渋谷友廣
車掌 陳氏來有
運轉手 黄亦澤
車掌 伊達利江
鈴の音の意義

劍潭古寺
水月印禪火円覺珠光長不夜
滄桑經佛眼銷磨劫灰幾何年

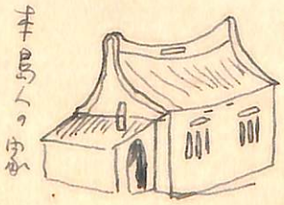
台湾の女



日本の分の文句は
危険富山行過盡 莫嬉近路又重々
若内桂蘭漸々発 玄蛇反轉黄成龍

動物園
鸚鵡 カステラ！ く
仏陵領巡
Porphyrio Poliocephalus
鶴亜目秧鶏科
雨傘蛇
台湾コブラ

山峰 玉雄 君と
水源地
佛桑花の花は紅い
流れ河の蛙えるよん蟬の声をきく
新竹街ゆく軽便鉄道



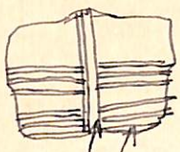
かつて暑一陽来復、蝎くの日、
双思樹の枝を折る。

植物園
ドイツ女が植えたのである
とても下手だ
すばらしくたる蘭、ちょうのようなものもかおりゆれてみる
瑞瑞葉蘭、紅葉蘭、椰子、大椰子
風船かづら、樓樹のたくい、とても多い植物はなり

milch

羽菓
木瓜（パパイヤ）

夜
長崎貴重品
貝の文化 殷墟発掘の貝貨、秦の銅貨、
東夷、島夷（書経禹貢）
台湾六千年史を書く、



織貝（ちくやん族）
非文化
詩経
山海経
孔子

布
帛
宋
宋

頭飾
高砂一高山國一竹暫（ちくさん）（白滝）（ぜんかい）
流れ
Kielung
台北
新竹

萬華
八月十二日
大稻埕
豚の油、汚臭、喧噪、新の苦しみ、乾されてある、蛙、亀も。

臺十分羽
一向吉凶何事？
一南方旅行！ 田中克己 廿三才
一往東南方吉貴人有平安得財八月三十外去吉

城隍廟
謝将軍 痩長
范将軍 肥短

陸文節
城隍娘々

蛇の黒焼は口をあけてみる二三十年の棒、
鹿の腎、鶏の骨
海仁草
人形の首をつくる人、
刺繍をする子供
鞋、台湾服
鏡前をこしらえる職人

きしゃんちゃん
留心火車往来

Mlle. 謝琴
陳玉鳳
康錦
M. 陳、王黄、翁、康、謝、鄭、張、
芥子園画傳（古画譜といふ）
頭飾、支那扇
台湾酒
公鶏、
米酒

花（ルコテフル・ウラウ）

春の一番初の日の
少女達とてもすばらしい。
また彼女達それを云うすを知らぬけれど
花をかざしその髪に
冠のやうにしてゐることを覚えてゐるから。
風の
彼女たちは春の祈り（とさまよひ
あこがれの心の彼女たちの姿を
それの彼女たちの姿を
そして凡てのものの銘くさを
彼女たちの伝に一つの宮殿を与へる

蛙の池のぶんぶき先ぶくれんぶ
たえかれは蚊喰のやうにも寒ける
夏の夕

後公園で音楽を聞く
法隆寺行きする人。
山の上の花は白ひかり
花人は何也一塔とあれ
永くなると色艶がなくなる
茅葺、姫の孔、法隆の塔。

八月十三
台南まで
茉莉の花、墻、木瓜の木、パナナの林、甘蔗の畑、北部は早苗、南部は
牧場、夫竹桃の眼、鳳梨、パナナ帽子する夕日の木
濁水溪、大甲溪を渡る。石灰、断崖、河山、本牛山

安平　玉蜀黍、花生、芝麻、蓖麻、高粱、甘藷、蔗糖、米、茶、
廣漠を彩る緑、湖、養魚池で魚が跳ねてゐる、塩田のいかり人
一搬きでとれる。塩の結晶、やもりが啼く。蛙を食べに出る。塩粗いし
ゐる。ハ鷺を飼ってゐる主人。本府黄の清涼水、コウ家の
廻廊。千日紅が咲く。億載金城すれ、電柱、合歓草の頃、
弧れた塩、菊西瓜の頃、水上ねこ、きの樹は仕とらのたんたら梁、多いかる射
する。城郭の蓋の池にせまってゐること。砲台、墓山、ゐるかと見えるる
墓。そこにもやとい。七鯉鯛は連てゐる。沈船の墓、廣草口段半
鴨、孔雀、拾ぬかしらアア 物から。（新化塩金社をとる）
ピポ 蔗の果、パパイヤ、蓮むる。 ユアレヒト此石

十四
西龍殿　新れを注く陶の子
西龍殿　鹿耳南鯤身城靈結濯
蛋
龍耀　馬内廻海　呵護紺宮
公海殿　文朱殿　三龍殿と五つの一つを蔓の廟の多い町

（ていは虎嘯を龍吟としてゐる。
もしもしアア
蓋殿の石の要害　史和殿の女のまいの、城壁 樣い表和の這ってゐるつと
多湾まつて（榕樹）パパイヤの花、樓閣ゐい上蔓を法華のてゐる花法
（台南ていは車大）　蓋のいるかはの運河。

台南　赤山城樓　蓋壇樹
内
観自在
塩
塩
陽殿
井
印度の
榕樹
文昌閣
（せのまとはをし）
八十
文昌宮
女のまく、れよまちゐんみを
を作られた人、教ゐみくて用ちられ
ちまつたと

こいを出るとオ茅茹
花車（この径）ろ傳が曳く
蔓物（女の傳みもつ五つ物ろ）
位牌（祖母のらしい）
喪主（海辺で、敷をかす）
阿深ろ隠をとる
田舎の敷屋（台辺）
（車いろ霧画）
女　注く女もゐるうこと。

関帝廟（武廟文衡聖帝）
二輪か芝居、老役二（青衣）、花旦（嫁入前の娘）、女（娘）、乳母（女形）
居を果てめる。
男方あり。群衆あり。

人倫之至
（紅）太歳庚甲戌季春穀旦
賜進士出身 御前侍衛福建陸路提標右營 … 敬書
紅　管

萬世人極

~~軼倫超群~~

軼倫超群

數定三分扶炎漢討吳伐魏辛苦備嘗未了平生事業　関聖帝誌言

志存一統佐興朝伏魔蕩寇威靈振始完當日精忠　×××

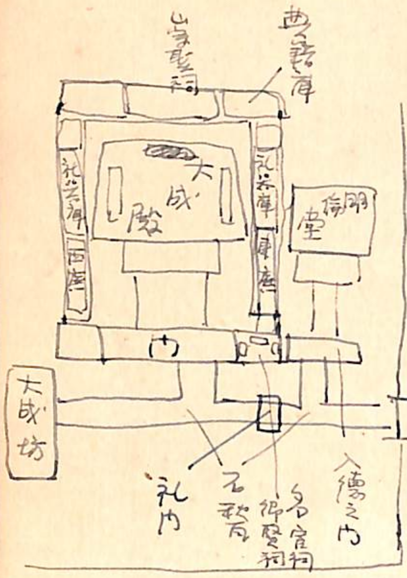
さつその老役を描く恩ひをかまてゐる。

媽祖廟（天后宮）　天の卑猜みの郎と
おれを焚く。おみくじを引く。　五十六番

天后宮
靈籤　第五十六首
種得藍田玉一雙
鳳凰相戲出翱翔
貴人遇有非常遇
代々児孫保吉昌
弟子楊可銖敬謝

名宦祠に祀せらるゝもの十人
太子少保兵部尚書 福建總督范承謨之位
太子少保靖海將軍靖海侯 福建水師提督施琅之位
太子少保兵部尚書 福建總督姚啓聖之位

孔子之廟



門（金・首季・報考）

東廡
先儒 右（36人） 神位（公羊高、孔安国、司馬光、欧陽修、范仲淹、李綱、陸九淵、文天祥、方孝孺）
先賢 左（41人） 神位（陳家、樂正克、萬章、周敦頤 etc.）

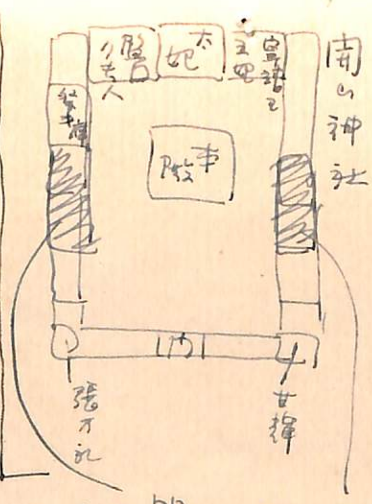
西廡
先賢（右）（39人）（公冶長、左丘明、公孫丑、程頤 etc.）
先儒（左）（34人）（穀梁赤、董仲舒、杜子春、諸葛亮、胡瑗、韓愈、韓琦、蔡沈、陸秀夫、王守仁、黄道周、黄宗羲 etc.）

大成殿内には

〃顓孫子師
〃仲子由
〃閔子損
〃端木子賜
先賢冉子雍
先賢冉子耕
〃言子偃
〃有子若
〃冉子求
〃朱子熹
〃宰子予

壁内に（東壁に忠節 西〃孝義 の大書あり）
西
本国 孝廉方正 盛之、〃〃武進士、〃〃舉人〃〃、文進士〃〃
〃〃舉人〃〃
〃〃武舉〃〃

南の神社



明銅山守将 張公進位
〃水師四鎮 陳公陸〃
〃左虎衛 江公勝〃
etc.

明 正兵鎮 盧公〃
〃戎旗〃 林〃勝
〃総練使 王〃起俸
〃忠振伯 洪〃旭
〃建安伯 張〃万礼
〃援勦右鎮 黄〃勝
〃山宗明伯 甘〃輝
〃懐安侯 沈〃瑞
〃閩安〃 周〃瑞
〃定西〃 張〃名振
〃諮議参軍 陳〃永華
〃参軍 柯宸樞
〃戸官 楊〃英

漢文台湾日々新聞

夫婦房中口角
大手双婦

新荘街人。張阿浪。年三十六。去十一日午後八時許。与妻張黄氏。年三十三。在其寝室内。為事口角。阿浪大怒。遂出菜刀。傷黄氏左大腿。及膝蓋其他計五傷。被刑事捕入司法室究弁之。

大正十一年来
第二暑熱
逼近百度

十二日酷暑。台北三十三度五分。十二日暑気更甚。午後二時四十分。累至三十七度七分。即華氏九十九度九。明治三十年以来。大正十年七月二十一日最熱。達三十八度七。十二日為第二次之酷暑云。

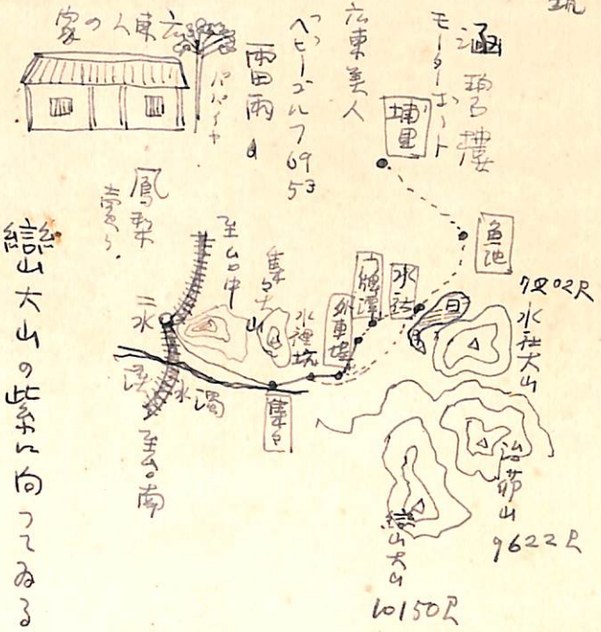
安平

An-ping

Wô kêng ai nih!

八月十六日

台南 ← 二水 ← 水裡坑 ← 水社 → 魚池 → 埔里



八月十七日

水社ー水裡坑ー二水ー台北

水裡坑の蕃人

おまへ自動車を見ないか　おまへ自動車を押ないか　おまへ自動車を見ないか　おまへ一度赤い紅の衣を見ないか　おまへ一氷屋の前で踊る日を見ないか　（三人）男一　（三人）女一男二　（一人）男一　子供一

鶏山大山の紫に向つてゐる水牛

童は遠はれて草深い石段を降りてゆく水牛

自動車に轢かれる鶏、まつ黒な山羊の女よ

山陰にかくれて生きてはなつたる沼の上を舟はゆきかう。

パパイヤを強く抱えたる本仙を、パパイヤ見れば水社の山雲とゆれる。

ゆかたの（すとのこ）ゆかたの（すとのこ）ふかし光と水牛（のりき）（童）いまはみだりけり。

八月十七日

台湾のお盆

台の上の人形、その高い沼のお見つもの

（豚の肉、鶏、蒸んな金物、菓子）

台湾の毒蛇

雨傘節（アマガサヘビ）

飯題倩（タイワンコブラ）

亀殻花（タイワンハブ）

赤尾鮎（アヲヘビ）

百歩蛇（ヒヤツポダ）

これらの毒蛇ゐる。

糧草　蛇頭　蛇尾　蛇皮　蛇胆　蛇酒　蛇肉

台湾人の町には印屋、女の鞋子屋、呉服屋が非常に多い。

古い先達屋、刺繍する家、佛壇屋

双思樹

みんなみの島のてをすらおもかいをもきみわすれず　（ゆめませ）

城隍廟のおみくじ（十三番）

出家出世初年

出家出世此成

苦厚心寂快　吉凶定下先

八月十八日　福建毎月有名（福建通志巻七十一）

日	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月
月	正月初四 安神	二月初三 元帝	三月初三 龍神会天白	四月初三 火神	五月初五 龍神会天白	六月初六 東嶽聖帝	七月初七 東嶽聖帝	八月十五 東嶽聖帝	九月初九 東嶽聖帝	十月初一 東嶽聖帝	十月十四 東嶽聖帝	十月二十 東嶽聖帝
初一	初九 玉皇	初七 閻王	初五 南極星君下降	初三 西王公	初一 龍神大会	初六 水仙	初五 龍神大会	初四 翁爺	初三 水仙	初二 送神	初一 送神	初一 送神
十三	十五 劉将軍	十五 眞人	初七 居原	二七 二郎神	九月初九 芝麻帽	十五 百神復起	十七 張良	十七 金龍	十九 観音	二十七 冷風	二十七 大盗	二十七 大盗
十五	十七 上元	十八 白土	初七 朱太尉	二八 大姨	十五 百神復起	十七 金龍	十九 観音	二十七 冷風				
二十四	十七 上元	十八 白土	十三 関帝	二九 文丞相	十七 金龍							
二十九	初九	二十三 媽祖	十六 天地合日財恵	七月初七 牛女会	十九 観音							
二月初二	白鬚	二十八 東嶽聖帝	二十一 龍母	十八 鬼子								
初七	春期	二九 諸神外天	二十九 風鎮	十八 神然会								
初八	張大帝	四月初一 白龍	百契 大馬王	三十 天地合日所恵	十月初五 春風信							
十九	観音	初八 佛子	十二 彭祖	八月初一 竈君朝天	初六 天曹下降							
二十九	龍神朝天	十四 純陽仙師	十八 善婆	初三 所恵	初七 水仙王							
日	二十三 太保	二十三	十九 観音	初五 九皇	十七 水府朝上帝							

八月十九日

海上のやまとの方に向かひてすいしきるもゆるところをすまるから生の花るもまはるみなみてんなりとおもいしきを樣柳の高きこずえんのぜんるゆへゆへを仏のとせるもの

八月十日

尾崎高　　das Rendezvous im Pflaumengarten

八月二十日　大和れひ喜吸るの

八月二十九日　陸上

解山之邦君　新竹州竹南郡後龍三三九

陳中川君　台北州海山郡三峽庄分館後一二八ノ二

李世家君　台北州海山郡八張字八張九

長衫

檬果（樣仔）

蒲桃（香果）

蓮霧（琴車霧）

蕃石榴（拔仔・椰拔）

八月三十日　雨降　西山池

八月三十一日

この大いなる島は土人自身よりは北港（パカン）または（パカンド）と呼ばれ、支那人（ら）は大流求（タイリウキウ）（即ち大琉球、これに對して琉球も有り）と呼ばれ蕃人（しくは西人）（カスタリアン）よりはその快く且つ魅力ある景観のために（ヤルバル）

Notes on the Topography

×

住人たちは單一なる言語（せず）なくして數種の言語を話し、而して彼等は王公を配者、酋長を持たず。彼等は相互に平和にはあらず、各部落は他の部落と絶えず戰闘狀態にあり。

土地は多くの美しき河流によって横切られ、[illegible]魚に富み鹿、家、野生の山羊、[illegible]えび、雉、鶏、鴨、鳩その他の鳥類に富む。この島はまた大いなる種類の獣を有し例へば牛馬の如きものにして、前者は数多く分れたる甚だ厚き角を持ち居り。これらの獣の皮は甚だ堅きものと思はるる。而して彼等は山羊地方に於て獣を捕へ皮を剥ぎ土人によって打つかげと呼ばる。又虎ぶうテイホイと呼ばる。他の食肉獣らしは熊と同じ姿態なれどやゝ巨きくその皮はより高價なり。

この國は非常に肥沃なり。樹木は概して自然生にしてその数種は果（耕作されたる地甚少き）実を結び土人によって甚だしく好まるるものなれど欧人は解るることを貪ぼせず。生姜、肉桂も見出さる。尚この国には黄金銀銅もありと信じられ、[illegible]支那人はこの地を訪れ原鉱の一部を自国に試みに送られと傳へらる。予自身はこれら鉱物を実見したることもなく、告げて甚だ狂溺せし蘭人の如き興味しれたず。

olovang

3. 蘭人貿易の廣史

台湾の目的近傍を参照する蘭人西人のこの島に来着したるは蘭人に遅れ先立ちしも名称を与へあるなり、然れどもその何時に始めて彼等の来りしか又は何を彼等は求めたりしかは明らかならず。

蘭人先立ちて英人の来りしを主張する者あり、即ち彼等は日本の島に城塞を築きしが彼等は不幸にも放逐されたりと。されど彼等はこの事の起りし年月を指示せざる限り、事実は之を証拠なきと思惟す。

蘭人の来着に関しては確実なる且つ正確に語ることを得。彼等は始めて支那に帆行し来りし時、その直ちに目的は彼の国と貿易し日本（持ち来すべき商品）を得かくして蘭人を圧迫せんとしたるものなり。然るに支那人は國法を以て外国人の入国を禁止するを以て彼の屋敷と困難の経験されこれらの理由の又他の事件の為に彼等は始めて澎湖の島（猫）（漁夫群島の一）にして北緯二三度三〇分の地に横（正しく北回帰線の下に位置し）ラモア島より二十二哩の東、台湾より十二哩離れたり）

Pehoe

かくして此地に到達したる最初の和蘭人として知られたる提督 Wybrand van Warwyck なり。彼はパリニより一六〇四年の六月二十七日支那に向け出帆し颶風のため澳門に到ることを妨げられ八月七日彭湖に投錨したるもつ(八月二十九日または仲秋)支那人の報告を持ちたる(彼の)使者を本土に到ることを許さ(彼は)こんにち支那人の報告を持ちたる使者を本土に到ることを許さ(彼の)船をとらえ貿易することなしに彭湖を去らしかた来一人はかくすべきことを通辞―彼等の上陸を妨ぐるため五十隻の戎克をもって登場したる支那官吏―に勧告されしより、一六

八月二十七日。海風や四維漢の像の漆はげて

~~[illegible]~~ 海風用

~~[illegible]~~ 埔田出蛇

~~[illegible]~~ 島と屋宇の出

~~脂燭~~ 陣は米酒福徐酒

~~[illegible]~~ 下がる

~~[illegible]~~ 陰鈴なれ

その後(一六〇七年に至り)提督[1]コルネリス・マテリーフなる支那に向け出帆し、貿易は約束されしも確かなる返答を受取らざりしによる。

[1] Cornelis Matelief

[2] Cornelis Reyerszoon

[3] Johan van Meldert

確かなる返答を受けるのためにラマオ島に投錨した。然しも那人は先づ蘭人に彭湖へ行けば、そこで戎克を造りて貿易をなさうといかさまの替成せず、重大な契約はしたが実行しなかった。支那人の欲する所を知った蘭人は何人にも欺かれることを肯んじなかった。この企を継続することを決心した。

そこで艦長[1]コルネリス・ライエルスゾオンが派遣され、又も彭湖へ向ったがこれはその地の支那人と話を纏まるかを見るためであった。しかし漁夫ばかりの住民は蘭人を怖れ逃げ去り近づくことが不可能であった。しかし遂に成功した。商人頭の[3]ヨハン・ファン・メルデルドが一平和の印を船尾に掲げたるのみで遣され、我々蘭人と商談することに従事したのである。そして彼等が蘭人の平和の外に何等の[illegible]

[1] Chinchew

この会合の結果として三隻のジャンクが用意されファン・メルデルド氏はそこに[1]漳州で河に航行し、しかしこれも又住民たちは我々の近づくのを見て逃亡してしまった。しかし遂にファン・メルデルド氏は支那官吏に説くを得、彼は早く貿易のため[illegible]旦つマニラの西人と支那人が貿易せうんことを勧むるために来たと分かった。そこに於て支那官吏は上官に又[illegible]に表した上確答を[illegible]約束した。しかし彼は先づ最初にメルデルド氏がこの河より出発しかくして凡ての約束を避けることを[illegible]要求した。而して自身は直ちに厦門より七十哩[illegible]へ訓令を受けんことを誓った。

[2] Hokchiau

この官吏は帰還すると四艘の戎克を造りて使者を彭湖に送り、その使者中は一人の甚だ賢智且[illegible]なる人物(オランダ沈着なる者)なりし、貿易許すべしと我々が彭湖の島より去ることを[illegible]

[3] Ong Sofi

(彭湖は国王の所有なるべし)而して国王は我々が退去せぬ中は貿易を許可せざりしを[illegible]

[4] Jaques le Febre

[illegible]国王は自己の国に来[illegible]り許可せざりしを[illegible]

[illegible]人間たちと協商することを要求し[illegible]ことは出来ぬと宣言した。[illegible]

[illegible]は又別かつて云へり、我々が台湾島へゆき、そこに港を作らうとするならば[illegible]

[illegible]は何等の[illegible]試をし物はないであらうと云った。しかし我々側はこれを企てる自由をもた[illegible]

なかった。バタビアに於てその地位を見すてはならぬとの指令を得てゐたので。

かくの如く効果なき[illegible]の支那の[illegible]険の為[illegible]を考へた後、舎社は一六三〇年に至り、再び[illegible]

艦長ライエルスゾオンを支那へ派遣し[illegible]澳門を征服するか、[illegible]させるにしかず決した。

[illegible]澳門に来る船を看視するために残ってゐたよりかをを聖ニコラス[illegible]と[illegible]

[illegible]号を除く他の船は六月二十日に彭湖に向って出帆し、七月十日に至って、机のやうに見える

最高い島の一の背後に[illegible]泊した。この島々の間には[illegible]

看視してゐたが、そして澳門もしくはこれらは逃れ去った。

わたしはもってゐる
この半球を充す濃い液体がんて一様に苦く鹹いものであることを、
わたしの船を追って来る鱶や鮫のたぐいがんて毒見の役割を
を好んで食んで来た残骸の後ひかるることを、またねねもす流れる
黄金色の[illegible]を見える海のうなかに人命走きて船の進路
を阻むことも出来ず紺色の波の下に隠れみしたかれてゐることを、さうし
ていま檣の上で鴎の会切声もって人を陸たちに[illegible]とゆふことを
そのかの海の[illegible]しんすもことを、
同じ
その時わたしの船は徐々に船首を[illegible]の港の方へ向け変へるのだけれど、
（愚人の知慧）

わたしは見る
ヒドラたちの[illegible]緑色の群をなして流れるのを、海蛇たちの吹きまく
した鋭るの[illegible]んかい沖たちの檣みへるのを、海豚や鮫の[illegible]
潮の中で[illegible]直珠は[illegible]
[illegible]黄金色の陸のやうに見える[illegible]
が消えてゆくのを、また[illegible]
向かい陸のてゐる黄金色の陸を、

そこで彼等は錨を投げて美しい湾内に入り水深八尋の所に至って再び投錨した。
視野にある陸は平くるかるく木[illegible]生えるず丈の高い草よりみ何も無かった。
わい[illegible]のみは真水も見出されずえ[illegible]も乾燥[illegible]は幾分か渇を
いやした。凡ての炎れは本土から来た。
しかし[illegible]際はどこかこの近所に住せるこの[illegible]人命を[illegible]
で、彼等は[illegible]湾の南端に一つの港を定め、タイワン[illegible]島の近く[illegible]
そこには右人の支那人が貿易のために移住してゐた。こへ彼等はコーヒー[illegible]
を運んだ。こはピスカドーアからは約十二三浬はなれてゐた。しかしまたの
不便さを感じたのは、この港口は水深十一呎にすぎずしかも非常に曲がってゐて
大きな船は入ることが出来なかった。その上このタイワン島はわさな島であって
それは乾いた砂洲にすぎず僅に長さ一哩ひろ浮き上がった[illegible]離れてゐる。

七月十九日はグロシング号とペアポちとが支那海岸（浮るちゐ）に投錨した。
二十五日は圭を視、清州河の河口の側を追った、この[illegible]北東の側に二つの丘を
もってゐる孤島の[illegible]。河の[illegible]一つの[illegible]
陸は非常に低く、南西の陽に堆い[illegible]がある以外は砂丘ばかりである。
その一つは[illegible]よく伏た

×
廃れた城壁には檣樹の気配がまとひつってゐて、
それは紅焔を思はせるもので、
沖では浅船たちとしす灯が古城の灯たちを呼応して警報してゐる
のはわたしの身辺を脅かす影があるからだ、わたしはそれを
見得ない。

九月二日
捕虫網で、行良で、誘蛾燈で、糖蜜で
わたしは虫たちを捕へて殺す。
殺そうとして死んでゐる数々の彼等を
わたしは銀いろのピンセットでつまみ上げる
玻璃の小箱に入れる青酸[illegible]見えもしないちゐ
わたしは歯痛を感じる

×
緑いゆめぐれは沈む砲台
開いた砲口には鳥が巣くひ
防林からは風の弾丸が来る

×
賢人の[illegible]らい嘘
[illegible]と海と
[illegible]
椰子の檣に[illegible]旗が

九月二十日！

ぼくはようと新宿で邂逅し久方の[redacted]A町を歩きまわる

その雨いらかをぬらしふるいるを長椅子つけてゆくはだかるを

みんなみのパパイヤしげる園もゆきものおもへらしゴムとなりわれを

わたのはらいとたびわたりたびゆきしわれかすをいもめとおもひめ

海はけむり流れてゐるたゆう

（海の流れることをあの枝で知ったのだ）

孤独たち海月たちの無数を踏みてはたたせ

海はけむりうねって流れてゐるたゆう

その濃いイエローの色の水を

船と船人をうかべるためらい歯の形いこさ（上ゲ

奈落のあい深い口唇をあけて

皮肉なわらいで脆弱な詩人たちを噛むやうに

笑いながら流れてゐるたゆう

もう一度逆いたいその流れるた海の上で。

★

芭蕉の林をしらぬけ

鳳梨の畑の畝をながれ

ハンドルをにぎってゐた洲よ

椰子の木のかげに建てゐた

赤い瓦もつ家々よ

水牛を追ってゐたこどもよ

半島は霧のたつ秋が来て

弱いわれはもう疾病を病んでゐる

明るい太陽のもとに好信を送へ

夜のけむり酒杯の中に蹴とおって流れてゐる

★

おれはおまへの誠実を愛する

おれはおまへのぼんやりを愛する

おれはおまへのむらしをを愛する

おまへの誠実を時々疑ってゐる

おまへのぼんやりを時々わらってゐる

おまへのむらしをを時々憎ってゐる

おれはおまへを愛してゐる

九月二十一日　船上のフラウ

われは修羅となり

わるき歯を噛みあらし

われは渾身の力を傾け

わが立つ土を押し動かし

われ巨いなる陸の前いたて

わが船を打ち砕し

わが皮弱れわが骨砕けしかば

われわれ[illegible]膝を抱きて泣き[illegible]ら

★

秋は冷き雨をもって

わが時の臓を凍らし

わが靴底を世きて

わが足を感ぜしめ

われわが身の上脆弱を知れば

わが女性を抱き死ぬることばかりをする

九月廿六日
書　捨吉君と植物園
夜　丸三朗

老衰した火山がその壮年期に堆積した膨大な空の積の塔の岩を波の間に見てゆくこの旅はたしかに壮観なものであった。
鈴蘭の駆けるのをいくたびも見たがそれはアニライロオプと呼ばるべきものではなくむしろ陸の飛魚とでもいつけばよい。本生半島の黄昏生した斜面を僕は眩暈しながらゆくゆく太陽に絶大な信頼をもつことのできぬ時々それは雨霧に無復されると死をさへも感じて恐れたのだ。それから見た幾百の分子ずの煙噴煙の圏やを。神々の怒号を聞き来た僕にそれは悪魔たちを思はしめた。僕は本生半島の軒端で作った杖を捨て四んばいになって退却した。
波の穂を一つ一つ数へながら。

★

彼は花びらをひとつひとつ引ちぎって捨てた
そして埋める時気づいたことには土をかぶせる時彼らは何かを
同じことを知ったのだ。
人々は又鍬を屋を捨てて降った。
羽ある人びとは埋めた鉛の棺に寄れかかりながら
絹布を周囲に拡げ、卵を暖らし
黎顔を覆って退いた。
そして彼はまだ眠っている絹布と湖に囲まれて。

★

木の果を見ては噛むをかもめ性を
われはあの海の空の碧さを恐れぬ
女の意思なる者は喜びの秋を知らず
われ黄昏と昼の蹄沙華と万解の涙をぐ
年の節の情迫を解よべのみならず。

★

木の分郎の菊の花を手折る。
疏鳴の茉莉を忘れず。
すすだまの愛はさを鳴らめ。
鶏田女王の眉と月出で。
出羽の学いなるわたし部を装つね。
火ともし頃街燈の弧光のなしみ。
みなみなの流れば肯んじたり。
陸に死のそを蛇しむ。
蛇の影濃きかつスちげて。

(1) 分しりのそは「アニレクト」の「蛇」は「性」の視線である筆は、それはそれ以外のものではあり得ない。
(2) 思念は詩句中にあって、果実中の営養價のやうに、陸をれてみたけれどならない。
(3) リリスムは感嘆詞の進展である。
(4) 夏の上を素早く、かつかつと歩み去り過る眼、その眼に接へ且つその眼を必要とするもの
(5) イマアジュの乱用と過剰とはいの眼に掘ると不快な混雑を来す。ちょっらしすぎると反って何も見えなくなる。

(6) 作者の思想一二の言葉の中、つまらない方を選ぶこと。

(7) 或る一つの作品は、或る内的展開を、それを公表する行為又はそれを
いい、と、完成した、と判断する行為によって切断した截断面に外ならない。

(8) 大いに人気に投ずるものは統計的特徴が備はる。その質は平庸。

(9) 芸術家として新しさを探求することは、消滅することを探求することで
あるか、さもなくば、新しさという名目のもとに、全く別個なものを探求して
既成を変ずるか、その就れかである。

(10) 或る作品が新しく成される模倣は、その作品から模倣され得るものを新
むとる。

(11) 或る芸術上の作品は（又は一般に、精神上の作品は）その存在が、すで
に存する他の作品を規定し、思い出させ、或いは不完全であるかによって
一重要である。★

(12) 夢も夢幻も、なおしも詩的ではないのである。それらは詩的ではあり得
る。けれども運、任せに形成された表象は、偶然にのみ調和ある表象である
にすぎないのだ。

(13) 詩的状態とは全く不規則で、不安定で、無意志的で、果敢ないもので
あり、五官は開いかし、それを捉へ、それを生よのである。

★★★九月廿七日　Y氏宛手紙

金木犀白い初め

九月二十九日　The Topography of Formosa

賢人のやうに唯②広く荒い海と
珊瑚とる内湾とが一体で割されてゐる

木生羊歯の巨大な葉っぱの間に
暗い地層の傾いてゐるのが見られた。（Kiluung）

★②

雲が帆柱をおっかけてゐる。
星陰もむらがって来る。
起重機で馬をあるす。
積卸の精に旗が掲げられた。
船はもう呼吸をしない。

★③

北方に流れる堅固な火山巣に
地塊の意志をよみとる。
曲りくねった河の澱みで
水浴みする獣たちが現れ出す。

★④

双思の樹　植ゑた道の隅
お廟の屋根そりかへる天際
手代の要らぬ國に口ずさみを預ける
私は一本の杖となって頭から照らす太陽に逆らって行く。

十月三日

アルルレジェット　L'école de femme

私は個人の生活をおくりたい
私は引とめられてゐる
形をなさないさまざまの呪文に
私はゐる（てゐる、漠然とした傳説のために。

十月四日

シェイド・プロメテ

愛する鶴島のためぼくは卓を設けた
ちいさな鳥を愛することは一層強かった
四人前を入れ、錆いた水を盛り
十本ルでありぼくをとりまくのは沼の要れば
その水を浴るぼくはびんない世界しかし、
鶴はとりかえれ、自分の好きな一羽をえらって
聲よ来い、乾からびた肝がここにある。
ぼくは老年を知りたくない。

★

くちをあけてはえるが
わたしはこえんならない叫びはみられが
わたしを取巻くものが金ぴかはげしくしめつけるので
わたしは吐く、褐色のどぶどろを
審判者がそれを見て怪しむ、
いつの間にかわが目の前でそれを飲んでるかと。
彼は皮肉なる嫌悪を全く理解しないが。

★

可憐なもの、彼をえらばう
彼の唇や額を新い国愛して来たが
彼は泥んでいつつん

わたしは手を閉ちいうきする
回るのは過去はみうではないのだが。

十月六日　アルライエのクラブ
城島徹の気味わるさ

十月七日
田辺耕一郎とかえかいと

★

ゆるい夜
階段を降りたら星とともに降ちる
海のあげる飛沫を浴びる
木々の枝に引っかかれる
毀れた馬車にこうもり二匹
車輪に巣くってゐる鼠どもを驚かす
一散に駆け出す小妖精の車
枯葉を着いて踊まる
潮の満潮が見まって来る
月が覗いみくしてゐた星が埃物する
時計塔の時計が眠をこすり
オウムが呼ばれる
汽笛と雨滴とが一緒に来た

★

嘴をひらけ　鶴鳥たち

おまへたちは起き上る　卵殻を見すてて
瞳の淡紅い光の中では
何もかもが鮮かだ
羽をつくろへ　歌へ
わが命令の下に何もかもが美しい

★

葡萄畑の段々に籠を背負て来た
帽子に枯葉がついてゐる
電車は揺れてゐしやうに眠い
汚い足袋裏を見せて家鴨たちが寝てゐる
松葉がこぼれ落ちる
棚荷物棚から紐が垂れてゐる
もうすぐ出発の驛だ
永い空虚　長時間　感じ出してゐる

十月八日

菊の花を用意した
ヴェエニュスの祝祭のために
風邪の薬が代の中で鳴る
乾きつた履物が道を横切る
落葉の艦隊
花瓶に埃が浮く水を注へる

椰の樹に日比布を乾す
海峡を通過すると船はもう見られない
白雲り日に閉ぢる花は
雨天には傘をさすよう心に気をつけねばならぬ
熱いのみ物で膝をぬらす
氷瓶かたかたと揺てゐる
展覧会で鷹がとんでゐた
プールに陸の子が生れた
化学教室は暗い
蛇が両方陸をつないでゐるが
血は体のどこからも出ない

馬にねて残夢月遠し　茶の煙　ぼせを

梁元帝
夜々曲

石塘瀬聽猿
嗷々夜猿鳴
濛々晨霧合
不知聲遠近
惟見山重沓
寧知人有憶
孤燈暝不明
寒機曉猫織
零淚向誰道
鷄鳴徒嘆息

直幸有秋風
秋風吹廣陌
蕭瑟入南閨
愁人掩軒卧
高窗時動扉
虚館清陰滿
神宇曖微々
網蟲垂戸織
夕鳥傍欄飛
纓珞空為系
江海事多違
山中有桂樹
歳暮可言帰

十月十日
松下武雄氏宅三句

落葉に霜つく朝も近からん
やちまたを落葉ながるるとおもふなり
すすろなる こころ 黄葉に向いをり

青銅の馬が跳ねる
街を流れる熔岩流
血の噴水で走る染まる
自動車は蛆虫のやうにのろい
一隊の野戦の服装は黄濁りの
緑色帽子をいらの手が
舗石の上をとまらず

十月九日
ふみ子 紀州のり
吉山行夫氏 岡本正一氏、
西脇順三郎氏
堀口大学氏 近藤東氏
阿部知二氏 北村常夫氏
飯島正氏 中村真一郎氏
左川ちか氏 江間章子氏
百田宗治氏 阪本越郎氏
高岩肇氏 丸岡明氏
和木清三郎氏 酒井正平氏
山口下羽男氏 今日政氏
加藤一氏 麻生正氏
那須辰造氏 田村泰次郎氏
宮内良精一氏 渡野隆三氏
岩崎良三氏 三浦逸雄氏
辻野久憲氏 etc. etc.

十月十五
東海詩
雲霄(オホゾラ)というに港があって
蕉樹に黄果が熟するとも
李白郎は出でめ難い
旗を掲げて大型の戎克が入って来ると
颱風が雲を巻く
椰子の木が揺れると猿が隠れて来る
港の外では波がまっ白だ
雪を見め風ゆるんとへいは塩をもって来る
塩は天日で作られる それをつけた手巾は白い

東瀛隅一洋主筆 ~~柿~~ 存神
~~人不探蒼古世~~ 似不探甘美橋果
十月十四日 丸の宅
その電車の乗客はみな眠ってゐる
開いてある窓からは寒いといはやうな風が
果物の饐る香りを運んで来る
停車場では乗客の代りに燈が待ってゐる
私は陽立たしい なぜ彼等は眠り
私だけが醒めてゐなければならぬのか
私はうれしい 彼等の中に覚醒を開いて
風ゆらせてゐる種類の阿呆増ゆに陽会したので
車掌が窓を閉めて廻るまで

★ あひるとのまきり

のまきり：貴女はあひる雪より
あひる：白いことをあなたの自慢にならないわ
のまきり：わたしの見つけ出すどんな慰辞にも、その手には反対出来ま
すでしょうね
あひる：あなたおせじをおっしゃったの
のまきり：いいえ、どうしてほんとの嘘を聞えないからと汗をかいてゐる
のびす
あひる：まあお上手だこと
のまきり：……多人の発見見けしも多向を正ぴっーすとしたな
金言ん しちゃあ
あひる：何のこと、それって、
のまきり：わたしは独りごとをおくせがありましてね

あてる：：僕で考ヘロおつしやるなんていわ
かまきり：：まともに面とむかつていのよりでなかあてる：：よくつてよ、いくらでも仰しやつて頂だい
かまきり：：そういう風に前をくねらせてそつぽをむいた風情をわたしは大へん好きなんだ
あてる：：どうせそうでせうよ。皮肉おつしやるとんちやないわ
かまきり：：わたしは皮肉とかいう何でも角人をおすべつけう　なつ一方をおそばらんいものだ
あてる：：女つてみなさうしたものよ
かまきり：：貴女はまだいい、方なんでせ〜
あてる：：えゝそう、あなたかさんないと同じ程度ない
かまきり：：わたして、
あてる：：ひとのきよをが気にな位なら、自分のきよをもし気をおつけいなつたら（せいく）
かまきり：：わたしは自分の前のすぐる人間はありませんよ
あてる：：自気でいわ
かまきり：：おまえ大きい
あてる：：悪病で
かまきり：：そういう風にいえます
あてる：：まあ御の強い!!
かまきり：：さう、強い者で弱く、弱気の者で強気な
あてる：：謙遜してるやうな食家に告し、捉へ一目のやうにつくしい
かまきり：：あなたの一部のようなとつよ風男
あてる：：ねえもう仲好くしませうよ
かまきり：：お仲合いはもうおしまいですか　御遠慮なさま

十月十五日　松本善海の肺病

僕は彼の皮が重宝かつしいなるらしい
体重は十一貫を割るかしれぬ
もしも豚が一番美しい獣であるなら
僕は笑ふであらう
紅葉のある鈴りで
体を洗ふ獣より美しいものは
それを映すカメラでは断じてない
苺のとさつまいもと
黄楊の櫛にヘアピて
彼女は手入れを怠らない実に不精な世だ
僕は彼女がおしやれになるまで家を建てない
白骨になる指に霜の降りるまで
山茶花の蕾もらい
帰来故園樹木青　不似故人無旧情
枯骨情然撫腹臥　爾今何樂保余生

十月十八日

食い飽きて わたしの眠る前の
一瞬に わたしは肥えてゐる自分を覚える
昌既が来てみかる　靴下の先に
銀の鍾りをつけて海に沈む
山窩の群に入って松の果をとり貯めると
朝鮮とは　南端の山から成る半島が見えて来る

十月二十日　近藤安氏　春山行夫氏

旅行

ポストが伸びてゐる街角を曲り
高いれの見える通りを仏蘭西人
ミオソテイスを摘み
牛乳しぼりの女にくれてやると
お礼に牛乳パンの一束を貰ひ
郵便脚夫のやうに家々に
それを配つて歩くと道がつき当る
引かつす敵。海が見え
軍艦でお祭りをしてゐる
煙が吹き流されて面白い
それで環状がしだ子供の頃を思ひ出す
しめつぽい泥が湧いて来る
石段を下りる駆けることは出来ない
杖ちん手すりをこわす
犬が待ってゐるので怖しくて
立ち止まると芸術として
十女が首根っこを掴つる
僕はそのまこに近立ちをする
雲がもれいい七色に見え
軍艦はマストを空へつきさす
黄色い葉が降ってゐる
夕刊売りが立止る

リボンをほどかせない手紙
スカートにゆるむつて無しやうに気味わるい
青銅色を錆る工場の前で別れを
金色の十字コレエトを三つもらつた
ものもらひの多い日だ

アルファベット

アメンドオの実が鈴なりで
いろんな玩具が欲しくなる
うれしいのはお休みの横がひらめくこと
えん習の兵隊が僕ら入って来る
音楽は単調で眠くなる
神様が多くを抱くと
金文字の本の背皮がそろつた
釘ん帽子がかゝらない
煙りが登ってゐる岩まで遠い
小猫が木の上で居眠ってゐる
山茶花とゆ花を数はつた
こしメエんの吐く火
山々より黒いのは黒檀
蟬もそと鳴かないまは犬とゆ
舞
畑をぬけて来た
裕州
[illegible]
血に似た夕焼
帝い新しい先生の靴を穿き
手で上がってゐるとて食ん会の

扉を押すと開らかぬ時い
波の背中で寝い
西まで泥が流れてゐて
泥はこの国ではきらはれる
眠くなると蝶を引く
残して来た菓子を思ひ
八十の咲く野原をゆく人は
書いも泣いもわからない
船よりも陸の方が軟い
蛇はまだ園を廻ってゐる
堀割にそわつかわいた
満州へと弟を旅立たす
短いつとを操縦する
村た時計が無い
目ん痛い風習のオ灰をする
文字は動いてゐる汽車である
矢車草ん蜂が来てゐる
柚の夕べは苦い思ひがあつたね
夜まで三十二分のこうてゐるね

うん酒飲む鼻の赤いおやじさんは死ぬ
籠を見たる那人もゐない
瑠璃草つみに家人たちは出かけた
連理の木に首つる人を見に
呂律も廻らぬ酒のみたちが来る
穿をかけたち牛がこわした

無

ピアノとマンドリンを弾いた女は
自殺者が隣家であると直ぐ引越し
代りに来る待のよく泣く夫婦がまた
夜ぴしぴし撲る音がする
居殺者は僕も好まない
既に三十二人目の棺が出る
鬱蒼たる大木の蔭ゆゑ
崇りがあるのかとひとはいふが
僕は僕の健康を未だ自信してゐる

十月二十四日

書つれ花火や
雨のやうに落ちる木の葉は
都を廻つてゐるのだが
秋はこゝでは僅かに ビルディングの角で
瀕死の息を吐くばかり
夕ぐれの展覧会では 水煙草
繪画展では秋草

凡て一様につまらない
奈々子と恵楚子の化粧するひるすぎ
空がかげつて来る

十月二十九日

ひとりでゆくと泪が出る
×
みちつれは無い
大きなくしゃみする女の子

★

全く参つてゐつた
×
誰も俺の心配をしてくれぬ
俺自身も餓りしたくない

★

やさしいくちつけで驚めるよ
夕陽の時の風のうしろは
いま野菊の花の濡れる時
黄金色の雲ととしん去つてゐつた

数々の追憶のなかの麹塵
わたしの夢にまで見かけこみ
夜、炎は火山のやうに怒を起す
噴火の中にわたしは感じる
川辺の楊柳のやうに首垂れる
数度なかんもたらす嘆きなる
貧乏の一つさへわたしに無いと

故郷を流れる大河の暗い光り
影をうつしてゐた形象を
いまはみな亡ぶ却し切つた

ゆめぢりは与陵の夢をこめ
ここの高い樹につきさされ
わたしの胸まで悲鳴をもたらし
すべて宇宙して捨て難い

わたしの樹木の中で夜鳥
わたしの枯草のしげみは蛇たち
それらが吹き乱れてゐる

因縁の深さを育す手紙を
吹いの夜受取る茉莉花
島からは吾つれもなく二の年は過ぎ
期待すべき明らは外らい美しい

あなたのつぶトオマが来する
精霊 指い伸み
あなたさまん叫びかけるものをもとる

十月三十一日 伽藍

太陽と埃の代りに泥や澤から霧が立ち
夜は[illegible]月の光で写らされて[illegible]
首垂れる緑杉の蔭ひとり
死んでゆく生物の吾吾を見詰る

霧は消えうせる前の微かな輝き
病人たちの頬に不毛の花を咲かず

遠い蕪菁や菫のときを眼犯すことなしに想い浮べ
深の深み湖の山々に鹿の死骸がうち上げられ
山々は紅葉の装いの中で棺をうち振の音を静かに聴く
そんな夜々を犬たちはうそうそ徘徊し
屍臭や鈴のようなものは遠く度って来る

背徳者の一群は指を噛み禮禮を血に浸して
妖禮の鐘が二人の死者の平鐘をかち鳴らす
土星は魚座で後[illegible]もどりする
終りなし去れた友人の葬列を追おうもの

★

川は流れる 過去を忘れるものの
山は[illegible]として全てを否定する
虚無の夜が女死するもの
絶えなき消滅の一循環を見る

十一月三日

花やかな女や美しいことばかり書きたいが
醜い人間のようを探しをすのしむつらしい
力だしなく一人前の義はしてるても
この眠はうつろし、そうんは人の幸せをそねみ
人の不幸せを祈る気持で一杯だ
花やかな女や美しいことばかり書きたいうちが。

★

山のある地方に頭蓋骨の捨てられてゐる画
落ち来たるような額面から 鴉が舞い上り舞い下りる
躍くと生命に燃ゆる命を見下して
栄光を荷ったりとかまる。
禮拝する禽獣のなかにわたしがゐる
果物のたくさんを手に捧げもち紅い頬をして
わたしは咲き入る。相貌に成就の十字が現はれる

★

太陽を一面に受けたなつかしい断崖がある
鴉の影がその裾を彩る
菊の花が開く花畑
眠ってゐる人は道をゆくゆく花を折る
貧くゐる女がそれを髪に挿す
鴉たちは一斉に飛立つ
しばらく太陽だけが断崖に残る

★

牛乳配達の降りて来る坂道
蝶が光って見える
コスモスの咲く垣根に
僕の犬が伸びると追の声がする
煙の上る山から鳥たちが飛んで来た。

★

一つの生命だけが美しい
牛乳の罐のちゃんが輝いて

半ば開いた窓から
凡ての落葉がやって来る
乳白色の霧がまいるの街をおほいかくす
犬たちが吠えてゐる
敵の開く音がする中で。

十一月十二日
アドモアのルーエンの可哀想な四肢梨に
吉日いろの涙をたんととり上げておくろう
—ゆめ—

★

鶏小舎と山羊の小屋の手入れ
この日曜をすごす
蜜蜂は眠る
山茶花の書一を
ナエス拾ひ かたりは
陽のあたる窓べで
何時の間にか引込んだ
枯草焼くと
白うさぎの毛が一の哀れな焼ける
パイプのような煙突から
煙が立くて日がくれる
靴を磨くのを忘れた。

★

雲の間から〔ラ〕コオルが見えた
カニメイデスの鍋面には
帽子と煙管が描いてある

生意気な小僧は
夕暮の忙しい時にも帰って来ない
雷雨迫の立ちかねとしきり
仏壇の隅までいなつまが射し込む
雛が卵を生んでゐた
青い驟雨が李の木にふって来た

＊ 十一月十三日の世界 十一月廿日の神宮

十一月十六日 巡査来 廣下痢 蜂々たり
十一月十六日 近藤来 春山行き 吾岡山治氏
十一月十七日 佐藤竹介 留守
十一月十八日 佐々厚来 ビヤ
十一月十九日 二木上会
十一月二十日 ユ、佐藤竹介

枯葉の立てる音は
紅葉の色といりまじって
ここの秋を美しくしてゐたが
華やかな着物きた人たちは
織るやうに林をゆきめぐり
廣大な枯芝の上に
あるやうに歌が動いてゐる

＊

鯉といふ隠れの紅の魚が一匹
巨大な円盤の中を泳いでゐる

水の冷やかな午後
寂寞たる世のふるの影映して
雲めぐる空が立ってゐる
紅葉せぬ木のない公園は
ギリシア風な庭園の噴泉を
押しとどめてしまった
よごれた水に沒落の残した毛が浮く
低層のやうに浮いた

＊

パラの木が美しい
印度風の小径
二列の高い立武者の出格子
蛇形の水が湧く
ペルの樹、パンダヌス、ツウラオ
鳥の中央の方にのぼる
蓮々童地らしい

＊

草花や木の葉や花の輝かしい混乱
枯れなくされた一種の寂寥
嶮岨な山路にロを拡く
私の手は反みどろ
ロオタスの花を見るやうに
[illegible]
パラの木の重さのオセアニア

樅の木の囲む城廓で
われらは歌を語りたり
夜なかに 梅の花に話す
夫人の窓にかげりかまると
性急の私は一青い塵を立てた
彼は憤怒してわたしをみつめる
まず論破したるアモオルの神が
その濃い眉根にぶくついてゐた。

十月二十一日

岡の上に灯がつくと
月は金星に一歩づゝ近づき
櫻の木の葉かげで
汽車が止まる
新聞紙包みをもって
白服の男が降りて来る
谷間の家々にも灯がつく
櫻で囲まれた広場は暗い
アセチレンのまはりに人がゐぬ

十一月二十三日

多島海（ARCHIPELAGVS）

わたしを何のおとろかせたのだらう
その多岐の入江をわたしはよみまをし
海月と海藻の間に神々を見出す

夕月の様に輝いた額もつゆせたち
山茶花に似た唇の貴婦たちは
真紅の線になってゐる舌を吐く
病気になったわたしの友だち
太陽の光の通くてうすやうに
祈る瞬間だけわたしはものがなしい
たのしいいろんな想ひ出がこの夕あかりに
凡てかつて来る、古代の説話のやうだ

毛むくじゃらな巨人の脚か、または
古代の血にまみれた楯に似た島が
わたしの前面に立ちはだかり
背後から太陽に照らされてゐる
わたしの立てる波がまだ彼の足にまで及ばない
彼は様々の樹木をもってゐて
それから雨路を出しの角と顱頂をもつ
わたしを取巻いて帆船がゆく
わたしをとりまいてたそがれがある
凡てのものが動いてゐるが、その忙さは
悠久遥とおことばかりのためだ
わたしは出発するのだ
多岐の入江を身をくねらせながら
わたしは階段で粘はねばならぬほど蒼ためてゐる

十一月二十五日

険阻な山路を馳けるには
この自動車は古ぼけてゐる、その中で桜の枝を見る事が士気をもよほす。
八十の植ゑ傾斜を見下す地点では
蛇のやうな蜿つた大河は
もう銀色の一流れとしか見えない
水牛がこの高地にもゐて
雲かゐる山を眺んでゐる
その尾の向く方で鈴の音
パパイア、檳榔樹、八十の野花
本生半島の根元にミヤマストトギス
水が見える　遠くに山羊の群れ
黒い木立を通して耳障りなキラキラ光る。
そこから道は下る一方で
到頭一つの村に着く
トウレリ土けたる生は他国を見つけ
さびしく異国の風物なし
ホテルのある高地まで上つてゆく
湖では魚捕る歌がある。

△

ホテルではいらつしやいませ」
つまらぬ人の胸内に蝶類の額
すべる廊下をこかつてゐるのは
先に着いた肥大症の老婦人と
黒眼鏡をかけたその夫の教授たち
湖は山の足を浸す鹽
タバコをあかすと犬が現はれる
お茶はなかなか来ない
パパイアの實かゆれてゐるかまた青い
廊下で女中たちが押し問答してゐる
「このおゆる様はなんてやいんだらう」
ホテルの晩食に三十二匹の魚たちが
焦がされ殺される
海抜は二千呎

△

島の中心には雲がかかつて見えない
三角の山が方々に並んでゐる
ゆうべれんなれば虹が掛かける
電力工事の堰が白い
湖をゆくボートは喪社を見にゆくのだが
向こうでは故地人を送いやかつてゐる
雑居するお寺を
毎夜さとれるのはいやなものだ
歌に安来節が交じつたりする
こんな手段で一の民族が亡ぼされる。

△

あるは僕等は歌をうたった
空腹のためにそれはこえにならなかった
おまけりが来てしょっぱいて行った
それは一番の親友だった
彼の生えた人間が大嫌いの男だから
今頃は如何してるかと思ったが
彼はえ気で帰って来た
ぬるるからだんだん痩せ
一年たって巫女を呼んだ
巫女は白眼のんくらしっぱなし
祈禱がはじまると女は頭を強み
体をゆさぶって無意識になり
タバコの煙やパイプを食べようとした
僕等は彼の友だんだで
それを妨げたが無駄であった
僕等は某侯爵社の閉塞の詩文をし
歌いながら歌を、うたったから帰った
こころは北風にちぎれちぎれに泳んだ。

△

鋒杉の立ってあたり
みっちゃんは朝日の一反射で鉛に変る
みちは下りてゆく ひたひた波打つ海まで
山生かある牛がある

何とよ森だ。八つの粉が
空は白葡萄酒の色だ。
そして白葡萄酒の空の上に
白い粉が雲のやうに飛んでゐる。
ぐるぐる風のなかったやうだ。
みんなが歌や踊や踊りだした
やうだ。
木々が踊り乗る
山岳がうつる色を出す
病的な菌和抵抗の花が
赤い色の海に浮んでゐる
花粉は波の上に浮き
白い蝶はそれを追って飛ぶ
眠ってゐる鳥がとび立ち
ほくちから催眠剤をとり去る

×

珊瑚礁のやうな防波堤に囲まれた街
下町のはづれに強いのがある
杭に停った波止場のはづれに繋がれた
水に向って飛込む群衆
保の野のあこがれが彼等を記る

十一月二十七日　又また公園を彼った!!

大きく傾いた高原の横を通る

山脈の方へ近づく鉄道は

小さかしエルン横はってゐるので停車した

それは穿山甲にすむなかった

美しい鶴の群れ雨降ある蒲の叢を

ひとりとは恐れながら車中に指かす

既に濁水河は清水渓と変じ

雲を吹いた高山たち

渓の薯畑で十分に巨い巨人ぶりを示す。

おお芭蕉畑に立つ汚れた子供よ

わかキャラメルの空箱相をとらまえる。

それは弾丸の如く

機関車の背後に疾走した

重なる最後の喘ぎをマニコーの駅に吐きかけた。

十二月二日　又を見無み　良佐義竹介、中務、師村清氏来る

眼つぶみ三重　眼の少女である

あれが僕の妻

僕は夫でまだ青い

書記　肥下　敬市

良の大論戦　近隣を騒がす

十二月九日

わたしは縞になったシャツを着てゐた

横腹のところを魚がくすぐって行った

わたしの前に石があり

わたしが蹴ると轉がった

頭痛をさせる重い雲

鈍い音樂が砂の向に起る

わたしは縞のシャツを引裂いた

すべてわたしの影は流れてゐた

★

雑草の生えてゐる家根の向に

帽子のやうな尖塔があり

雀たちが朝の鐘をならす

入り乱れてる佐たちが集って来る

踏切りがある

彼等は足ぶみしながら列車に手をあげる

車輪音が歓聲にまじって去る

鈍くまた鐘が鳴る

あとこの手をとってとが来た

雑草の生えてゐる家根のところまで

★

枯れいるの良つけ小鳥たちは草にとまる

舌を鳴らす蛇はゐない

小石の影にたゝず白影

鐵條が錆びてゐる

跨線橋から人々が覗く
犬が轢かれてゐる
ひき皮のやーだ
空には富士
鐵路はまつ直んその方まで延びる

★

カタハルト・カテイ・スム
そこらあたりに神がある

★

白鳥のやうに浮く雲は
尻尾の方で山脈を掃く
太陽が眼をさますと
もう四辺は虜にされてゐる
辻で人形遣ひが立ち
影はまだ長い
風見鶏がひいく遠慮なしに
おかみさんが窓に比言をえめ
煙突で反がくつれた

★

市場で野菜がみづみづし
鋪石が濡れてゐる
自轉車がかすめ舞ひし
牛の肋がおろされて
鉤が鳴る
どこかで時計が鳴る
外に音はしない

彼女は鏡に故障をきた
ネクタイ結ぶ僕は手さぐりで
山茶花が障子に映てゐる
ゆべの詩はけて醜い
食卓の上の食べ殼のやうに

★

いつも紳士はパメステイツで
婦人はのマレテイックでありたいものだ
そこで神様が殺される

十二月十三日

遠い海から波が来て
眠りかゝるころに山茶花が植ゑられる
庭の芝は枯れ日陰では土がくづれ
父達の留守をして
もの呟き変なすを書を讀むのに
こゝをもそよみ悲しく思ふ。

十二月十三日

樑の木の下に楽器が棄てある
谷一つ向こうで音楽が聞える
谷間を葬列がゆく
雅びやかな宴がそこここに開かれ始める

★

にほひあらせいとうの咲く巷は何時来るか
小魚の泳ぐ巷は
凍豆腐を食べい悲しい気が立つ

「死んで行く和蘭人の歌」　12.18　酒井の手合同治　石井氏

江尚幸、伊藤聖

あなたやつれモアロエル　E母かるくわたしの後人相性をいましめんなつたわたしの相性を海の中にしまいこまとわたしは海を歌わたくはないなとなとと風なくつんとばかり腰や青い光を放つ花つてなど知しいくないわたしは歌いたいサアべんやくさつやすつてわたしの歌をよつしをとつ陳いその中つ狀態い就てすとあなたはそれを弱り切つたの狀態とそのおらるかそうそばぬばならんそうあることをわたしは欲してるのだから人欲してあるのだからわたしはわたしのこころが判らないのではないと思つてある時がある朝ハミかきをつかひ手ぬいで顔をくわたしは生徒で無いから腰ん提やてあるい手ぬぐいではない手である切られた手をくるくる廻しこ尚も助命を請ふのかわたしは歌いたい歌をあるつはHALNANの島の東ゥ沈んだ夕の船にて五百五十二話で船が沈むのがそれが何に基づのだろうおまー

蟹よ蛇よすつて飛ばもうよ論理も又とふとどと非ふとおまつの眼が怒そそ又つ見る

けれどあなたは怒らないすつて怒るいとは三人ではないか父母につて悔しみを歌いたい慣し生を歌ばよい新しい事をけつり紙に自ばいい手が動きれそう書けたよめよばおまーの卑怯な心ばそう何の陽ばかつるかな板の時卑怯を讃めぬ先生がるたかんん帽を着た男なるた大なるたれてこそそしたものを無くしちゃばいい先持ち尚僕はイヒヒと笑つばいいすると怪物たちがどうどうからいなから通えるまのの知気持がいなちばかりイヒヒとわら一ないのではないか蒲団をおつそう出をあきもて見るが声にならない眼が赤いから何をえてるのだろうこの眼は実を出た眼とかり眼は何も見てみない貌ん弟はおーん投げをえる犬をえる犬のるをえるのに何も見ない

ので非ふしくなつちまつて悲しいと心理学で教ばつんが教ばたいとも自僕は子明だとえつてイヒヒとわらつたあやーん笑つて見たいとおのでいたつたらどんなん気持がいだろうとみんなにそそやりたい　あなそそやりたいすで耐うないけれど何故だのこの蘭科植物は病気ばおまーたちを苦しをけるのかと母親たちがそんなむら呼びに来るけれど大変弟いな死ぬ前の時のやうんえが僕はあんたことなどありはしないちやないの何をえそそるのだろう僕は死について神んこて何をそうて来たのだろ　イグ　ムラピスムスとよ　イグ　ムラピスムスとつのイグ

ムラピスムはえらのかしらかしもそこのめばあるのみしうあるなかたのではないか年前十二時から飲みはじめてあたかあの子は偉いあるなかるのしう死ねとそのあ人がそれはいいなぜ皆見話でしかえばそいちやないのだろうかそのに税金がかかるのかしう税金のことも書かわあなるのかの書いるるとそのが明け多税金の長さんつて尺があるのかが尺とおのも見たこそはなーとそのあ批判を受けてるのであるのであるので無意識がすを動かす狀態を見せに来た博士ばあないことを書くすとあないそのわるだろ馬で跳ねて行くだろ行かのかしら跳ねるかしら何故君は答えないのだ君は答えるのが聞えないのだとそのだろうかそれがまた聞えないのだろうかさて聞きたくないことばかりそそるのだとそのかのかはないのかのだなはのだそはそれるのだそはそれないのかそはそれるとそのかそはそれないのの教話にて俗話にて多くのことばかりの言話まにつて五時間はかしたいのの教話にて俗話につて多くのことばかりの言話まにつて五時間はかし話したいそのことばにつてオストインデエエの才エ外人のつあの動につて鎗につて古見い昔話を知てるのだこの男は青銅だた

十二月三十一日「流域」

ここでは山岳地帯のやうん音楽がよく聞えて
青銅からかの
いろの炭が売られてある
馬たちが繋がれると道は通れない
砂利の上へ無笹から蜘蛛が来て遊び
日暮までそこは日があたり食物ことかいぬとおも

「　」

葡萄酒のいろに空は染められ
汚点をなして鳥がとびかう
遠近や高低を無視して家々が重なり合う
單檣船たちはもう錨泊してある

一九三四年

一月三日　肥下Yの子が明けた。
レイとオオで女たちは僕をまもりぼえてた
冬の年始には友たちが記した
カリカンの中で菓子が凍る
撲られる男は一月京都だが
クリスマスが過ぎれば楽しみはない

★

弋鳥鷹鳥などの北角が
私の背中を痒くする
私は眠いので休息し
夢の中で彼女たちに信仰する
アポロの使の羽ある女たち
夢のなかの外れ一所柄のない天使

一月九日　「そのあと」脱稿

一月十二日
重い過ぎんたるを刈株の並んだ水田では
氷がいわれはじめる
雲雀たちが枯れいるの長つけてその上を歩む
彼等が田圃を渡り続って
地平線をめりかえるとそう氷が足跡を埋めつくしてゐる

×

ズスへは　鑞の鳥を飼ってゐた
お天気のなかはそれは紡車のやうに
ぶんぶん唸りびゐを立てた

窓の外では樹木の枝が撓みはじめる
ズスへは鳥を干乾しんした。

一月二十日
古い波のまい氷りつった跡を渡った
僕たちは芳性農達の畑を横ぎって話した
「それは泥棒さ」
僕たちは詰句では出来ないけ濃癖いあらうと敬した
同的驛の吹雪が報せられてゐる

天野喜明　東京市杉並区東田町一丁目四。

友真之衛　大阪市天王寺区寺田町八
本郷区向岡弥生町　弥生館内

藤田久一　目黒区下目黒二ノ一七九　三省堂内

鍋田正美　本郷区森川町一七　菫平館別荘

高垣金三郎　兵庫縣西宮市寺前町一三
杉並区高円寺三丁目三一〇　山中信造方

山田鷹夫　大阪市東成区東桃谷町一丁目五八三ノ一
本郷区森川町八八ノ六　若杉方

山本治雄　葛飾区下小松町二九七
大阪府三島郡新田村下

丸三郎　世田谷区上北沢町一ノ三三二
千葉縣印旛郡白井村大字代在

室清　　宮城県丸山町二一　宮城師範

中野清見　　京都府天田郡西中筋村石原

井上樗　　滋賀県八幡市中野町中野医院

原田運治　　東京都世田谷区上馬一丁目三一　陣田方

紅松一雄　　大阪府豊能郡箕面村桜井四五

後藤泰夫　　兵庫県三原郡倭文村長田

相野忠雄　　杉並区大宮前町一丁目四一三

竹内好　　大阪市東区瓦町四丁目二三

杉浦正一郎　　杉並区天沼一丁目六九　三田方

和歌山市岡町寺松町二〇七

芝区白金今里町八九（富倫三七六四）

日本橋区橋町四丁目六（浪花七〇六〇）

神戸市下山手通四丁目一二七

服部正己　　徳島市富田浦町

長野敏一　　大阪市北区中之島宮里町一八

薄井敏夫　　芝区芝公園一四一ハ　古谷方

保田與重郎　　奈良県橿井町

埴井明　　大阪市淡蓮町池内

肥下恒夫　　中野区江古田南三一二六

中野壽人　　神戸市宮本通三一七

菊池克一　　本郷区曙町九一三

chez M. Plinson, 13 rue Albert-Lorel

Paris (14e) France

大宮法谷地七〇一〇　江口方

× 島稔　　仙台市東七番町一市田錦様方

和歌山市北新宮町

鈴木俊	大森区池上徳持町三八五
樽田巍	中野区沼袋南一丁目一五七七
鈴木勲英	世田谷区大内町二二
吉田金一	本郷区駒込曙町三。大谷一方
山口佐藤一郎	渡橋区柏木四八一三
岡部長章	目黒区目黒二四五四
川久保悌郎	中野区千光前町二五
高橋亀四郎	
羽田　明	京都市上京区右宮田民町五二（西陣三七〇〇）
丹波鴻一郎	渡橋区百人町一一三三
原口武雄	

松本善海	松山市大街道二丁目九
山口静夫	~~[illegible]~~
山崎清一	福岡県八女郡[illegible]町
武安宏司	中野区竹[illegible]五佐藤方
橋本　勇	~~渡橋区柏木四〇三 長野・諏訪・湯泉寺・長野~~
春山行夫	~~中野区[illegible]町二八~~
山口平修蔵	中野区沼袋北二一七五九
阪本越郎	麻布区飯倉三丁目二四
北園克衛	大森区馬込町東二一一〇九人 ~~[illegible]~~
三好信子	大阪市住吉区[illegible]丁目[illegible]
安川草夫	中野区沼袋南二丁目一五[illegible]番地

伊東静雄

九州ラグビークラブ

辻野久雄

安藤鶴吉

佐々木三九一

俵国藏

道野市松

松本彦

鈴木正元

森本孝

安川正弥

森本中寿美

西庄清一郎

×

岡田安之助

大阪市[illegible]区松屋通二ノ十五

浜谷正[illegible]通一ノ三六

松重巳馬橋

本所区五[illegible]橋一ノ一九

品川区大井金子町[illegible]七

大阪市西区京町堀上通五ノ二六

兵庫縣尼崎市[illegible]町一五トモエ[illegible]

滋賀県松本二ノ六六二 橋田本方

福岡市[illegible]福寺新町一九 九大寮

佐賀県[illegible]寺町三〇一

阪急沿線曽根二四八

広島縣佐伯郡[illegible]町油見

京都市左京区鳴滝音戸山町四ノ九四

×

浜谷正 松濤二五

増田忠

松浦[illegible]郎之一

×

岡八太郎

×

岡行義

×

[illegible]野正雄

×

本位田昇

×

[illegible]山幸治

×

村山[illegible]

×

金崎忠彦

[illegible]竹 稔

[illegible]正三

三島中

兵庫縣武庫郡魚崎町樓谷山井二〇二ノ二 内山方

北区天神橋[illegible] 一ノ五二

×

東京府下立川町平町三二〇三

仙台市

京都市左京区[illegible]下鴨中川原町二七

(上一八四三、政経書院)

大阪府北河内郡[illegible]町 京阪高槻線

京都市左京区浄土寺南田町九七[illegible]方

[illegible]町区九[illegible]三階 [illegible]

天王寺区[illegible]町五一

佐賀縣[illegible]郡

和歌山縣[illegible]町

大阪府[illegible]郡浜寺町[illegible]

奈良県[illegible]郡[illegible]町一五[illegible]

[illegible]北田辺町[illegible]

澤井孝之助　大阪府北河内郡長尾村
大阪市東区諸道寺町一
池田徹　堺区三田町五、塩谷方
中橋吉長　北区天神橋町六一
川畑勝藏　京都市左京区浄土寺馬場町一四九山田方
杉野諸二郎　京都市左京区吉田東町三三　阪田方
坂口喜三郎　京都市左京区浄土寺石橋町八一　長崎方
池内宏
和田清
加藤繁
内田英成
大島義昌
松本健次郎

麹町区紀尾井町九
世田ヶ谷区代田六五二一
杉並区和田堀町和泉三九二
松山市持田久保山四五。
大阪市南区日本橋二丁目五八

和田勇
周東博信
竹島新三
村田幸三郎
豊田久男
生島泉治
細野孝
藤枝晃
~~周田安之助~~
~~本位田男~~
~~北区豊島崎七丁目七七~~
~~中野区鷺宮一丁目一五~~
西山英夫
~~岩田之助~~
山本信雄
~~北区田端四丁目七七~~
~~仁科義雄~~
~~仁科義雄~~
久保克男
佐藤光人
~~渋谷区松濤十五~~
和歌山市浦通町北二
大阪市南区日本橋九丁目一ノ二四
大阪府泉北郡高石町南
大阪市北区上福島北三丁目
大阪市住吉区天下茶屋二ノ二
大阪府豊能郡豊中町橋本三七
京都市左京区北白川西町六四　田中長治方
仁科義雄　北区田端四丁目七七
仁科義雄　仁科方
仁科義雄　北区田端四丁目七七
仁科義雄　大阪市住吉区天下茶屋二ノ八
西成区玉出東二ノ二九
渡橋区戸塚町二ノ一三二　多賀方
近藤区江成町一〇一　誠光堂化学研究所
牛込区七軒町三十四　伊藤方
世田谷区三田四丁目二ノ四
神戸市須磨区小寺町四ノ三三
台湾台中州大屯郡霧峰庄立枝

加藤 一　　静岡縣富士郡富士町平垣

吉谷徳武〜
檀 一雄 一　　中野区宮前通一ノ四

三浦 治　　世田谷区北沢二ノ八〇一愛情荘